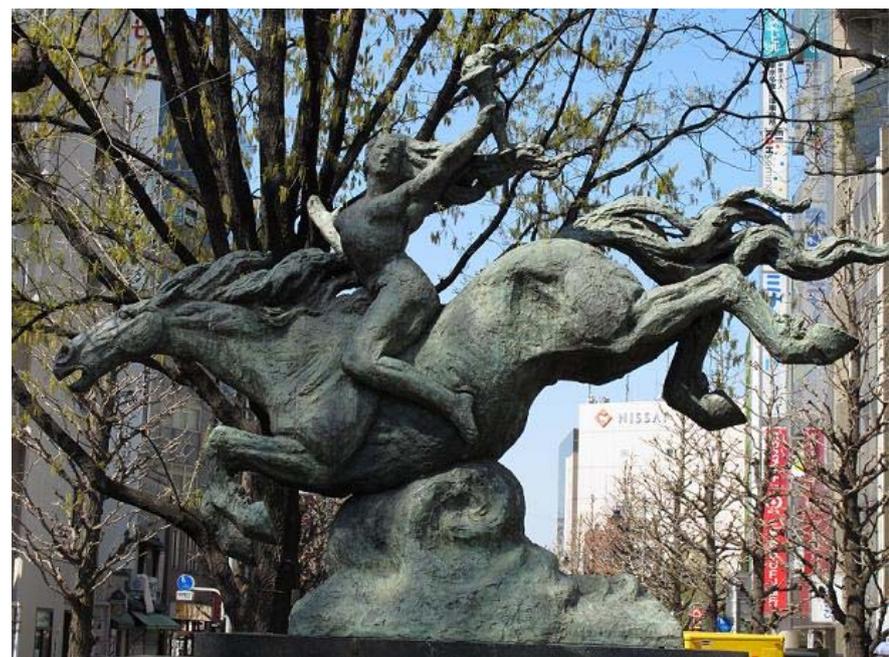


第二部 市民の心に残る戦争体験



北村西望氏制作の平和祈念像原像
(都立井の頭自然文化園 彫刻園)



北村西望氏制作の世界連邦平和像(三鷹駅北口)

戦後のシベリア抑留体験

吉祥寺本町 鈴木 隆

私は大正十年生まれで、昭和三年に武蔵野に引っ越してまいりまして、武蔵野の第一小学校に入りました。昭和十五年に立教大学に入りまして、卒業が昭和二十三年です。復員してからまた大学に復学し、卒業させてもらいました。その後、市役所に入ったというわけです。

私の軍隊の時の話をしますと、軍隊に入る徴兵検査のときに、陸軍でも海軍でも航空隊に入りたいと言いましたが、眼鏡をかけていると無理だと言われて、豊橋にある工兵隊に入隊しました。そこでは、鉄砲を持ち撃つというのではなく、つるはしとシャベルを持ち、工兵になるための育成訓練を受けました。基本的な兵器の使い方の訓練、それ以外ではいろいろな火薬を使って鉄橋を爆破したり、江戸川、豊橋、豊川で、鉄の船で歩兵さんを相手に兵員を輸送するというような訓練を受けました。

普通の軍隊は、古参兵と初年兵がペアで配属されますが、私の場合は農家出身の先輩でした。初年兵ですから、先輩の洗濯物から食事の面倒を見なければなりません。その先輩が入浴するときには、洗面器に石けんを着がえの下着を

持って、後ろからついていきます。お風呂では、パンツ一枚になって先輩の背中を流し、上がってきたら古い下着を受け取ります。自分は入浴どころか顔も洗えず、タオルをぬらしただけで急いで上がって一緒に帰って来ました。

工兵隊で幹部候補生になるための試験を受け、甲種合格し、千葉県の松戸の陸軍工兵学校に入学しました。今、そこは千葉大学の工学部になっているそうです。そこで将校教育を受けました。初年兵の生活と縁を切って学校へ入りますと、「掃除や洗濯をしている時間がもったいない、学校にいるのだから、その間余裕があったら勉強しろ」と、テーブルと本棚と電気スタンドが一人一人に与えられ、軍隊に必要な勉強を毎晩二十二時頃までさせられました。馬に触ったこともないのに、将校になったら馬に乗るんだからと言われて、乗馬の訓練をはじめ、火薬の取り扱い、毒ガス対策、火炎放射器の実射などをさせられました。また、いろいろな新しい兵器を使用する訓練を受けましたが、実際に使うことはなく、終戦になってしまいました。

工兵学校を卒業すると同時に見習士官になりました。卒業式の日、内務係の曹長から就職先が発表されました。日本国内はもちろん、千島列島から樺太、朝鮮、満州、中国、台湾、シンガポール、マニラなどに、数名ずつ派遣され、私は、中国東北部のソ連国境に近い虎林（こりん）と

いう所の工兵隊への配属が決まりました。

工兵学校を卒業するとき、これからみんな死ぬために戦場に行くということで、墓参りの休暇を約二週間与えられました。「何月何日の正午に博多の駅前に集合」と言われて、日本全国どこへでも行ける切符をもらいました。私は、両親の実家のある浜松に墓参りに行きました。

博多に集合して、船で釜山に渡り、釜山から、朝鮮、満州を通って新京(いまの新彊)まで軍用列車で行きました。私の赴任先までは五人の見習い士官と一緒に行きました。皆それぞれ任地へ赴いたわけですが、私は、北のほうに行ったことが運命の分かれ道になった気がします。南方戦線に行った者はほとんど戦死してしまつたようです。

私は、関東軍という満州での精鋭と言われた部隊にいました。日ソの防衛線は、戦争が進むにつれ、国境警備を受け持つ関東軍は再編成をしたうえで南方戦線に転戦してしまいました。そのため、要塞のあつた虎頭(ことう)を残して、日ソの防衛線は後退してしまつたのです。虎頭では激戦になり、国境警備の部隊は全滅したと聞いています。私は、終戦を鏡泊湖(きょうほくこ)というところで迎えました。そのとき、鏡泊湖から少し離れている満蒙開拓団の居住地に住む人々の安否を調べることになり、私が志願をして、自分の配属の将兵二十名位と通訳を連れて向か

いました。丸腰では危険なので、小銃や手榴弾などで武装して行きました。湖を船で渡つたところでソ連兵と接触したのですが、交戦することはなく、ソ連兵に事情を話すと、武装解除を命令され、止むなく従つたのです。ソ連兵の話では、満蒙開拓団の人々は、すでに居住地に姿がなく、逃げたのだらうとのことでした。部隊に戻つたあと、司令部から正式に武装解除命令が下されました。

終戦後、日本に帰してやるとソ連側に言われたことをうのみにして貨車に乗せられて、いつの間にか方向が全然違つて、シベリアの真つただ中のドルミンという収容所へ連れて行かれました。収容所の生活で、とても辛かつたことは、電気もなく、水道もなく、何もないところで、帰れるのが一年先になるのか三年先になるのか五年先になるのか、先が全然読めないことでした。将来が見えない不安感や絶望感から自殺してしまう者も出ましたし、逃亡をたくらんで射殺される者もいたりしました。収容所に入れられた始めの頃は、亡くなつた仲間の死体を何回も火葬させられたり、一番辛い思いをしました。

毎日の作業は、収容所の外で行なわれます。作業にはロシア語の通訳がつくときもあります。通訳がないときは私が直接聞いて作業命令を判断をします。誤つた判断をしてトラブルになつていけないと思ひ、夜、皆が静まつた

後、参考にする本やノートもない中、昼間耳に入った言葉を思い出すことでロシア語の勉強をしました。

収容所には、軍隊の編成組織のまま（部隊のメンバーのまま）入ったのですが、兵隊さんは皆自分の部下で、こちらの言ったとおりやってくれて助かりました。私たちは仲間同士という意識があり、皆の心のうちをよく知っていたことで、反乱を起こすような事態に繋がらなかったのではないでしょう。メンバーが不安になって私に判断を求めてきたとき、私も不安な顔で接すると、皆が余計に不安になると思い、決断力をもって判断を下すようにしました。その判断が正しいかどうかは分かりませんが、結果的には、そのことが皆の不安を小さくしていったのではないかと思います。将校になるために工兵学校で学んだリーダーシップの持ち方が、収容所の中で不安な生活を送る仲間達にとって、その不安を取り除くのに少しでも役立つたのではないかと思います。

収容所での生活は、昼間の八時間の労働（ロシア語で労働のことをラボーターと呼んでいました）のあと引き続き、夜間作業をほとんど毎日行われました。いろいろな作業をやりました。冬場は地面も道路も川も全部凍る中、木を切つて、それを馬そりやトラックで製材工場へ運びました。春から夏の終わりまでは道路がぬかるんで、板敷きでない

と通れません。馬は足が全部地面にもぐってしまう。この間は製材の作業をしていました。この地の気候は、冬場は零下三十度は当たり前で、春先に零下二十度まで温度が上がってくると、やつと春だなと感じるわけです。凍傷になる人も随分多くて、私たちが満州に行ったときに使っていた馬は、最初の冬で全部死んでしまいました。そういうツンドラの土地なので、逃げてでも助かる可能性はありません。逃亡するとすれば、地面が凍っている冬場しかないので、ソ連兵は逃亡を警戒していませんでした。

作業にはノルマがあり、それを達成するのは大変辛いものでした。主に伐採作業ですが、ノルマを検査する人がいて、仕事を八時間の間にソ連の規準で計算されたノルマに対し、何パーセントであるかというように、どれだけ完成させることができたのかが評価されます。標準量だけできればストープロセント（日本語でいう百パーセント）、それで基準の半分しかできなかったら五十プロセントと書かれてしまいます。体が大きくて体力のあるロシア人が普通並みに働いた場合を基準としているノルマで、体力のない我々の作業量を測るのです。製材工場では、たるを作るといった手先を使う仕事もあります。手先が器用で、この作業が得意な者がいて、軽く仕事をやって、一日に二百パーセントぐらい仕事をしてしまうのです。ところが、伐採

作業を汗みどろで力いっぱいやっても一日やって五パーセントなんていうこともあります。偏ったノルマをそのまま使われるのです。彼らは、それを矛盾と感じていないようでした。

ノルマによって食べ物の量が決まるわけですが、基本的に最低限の保障はするわけです。それにプラスアルファです。ですが、体力を使わない作業で食糧を多くもらった人と、たくさん体力を使った人の食糧が少ないのでは、とても皆納得しません。ソ連にわからないように、もらうのはもらって、それを分けて、皆同じにして食べました。

収容所の食べ物は、大変お粗末なものでした。主食がジャガイモと黒パンです。土地の荒れているところにおいて、いジャガイモとカボチャはできるのです。一生懸命採って、倉庫に保存するのですが、一旦凍ると食べられなくなるから、秋から春までの間は、倉庫のペチカに火を入れて、凍らないようにしました。

そんな生活を二年近く過ごした頃から、少しずつ日本に帰される人達が出てきました。しかし、私達将校は反動的ということ、ドルミンの収容所からさらに、コムソモスクという工業都市にある火力発電所へ移されました。そこでは、強制的に火力発電のカマの下に入る仕事をさせられました。頭から火の粉が落ちてくる地下の労働環境で、や

けどをしたり、衣服が燃えたりと大変苦しい仕事でありました。

ある日突然、何も聞かされることなく、それまでいた収容所から、保養収容所というところに連れて行かれました。そこでは労働が免除され、食べ物にも配慮されて、ゆっくり休めと言われました。三週間ほど過ごしたある日、係員に呼び出され、日本に帰されることになりました。どういう経緯で帰れることになったのかは、未だにわかりません。いよいよ日本に帰ることになり、各収容所からナホトカというウラジオストクのそばにある港へ集まり、日本から迎いの船を待ちました。そこにテントを張って、シベリアの奥地から我々みたいに出てきた人達がテントに入っていました。

シベリア体験というと、単なる収容所でどういう仕事をして苦労したかという話が主でしょうけども、それを取り巻く問題でいろいろなもの、二重、三重になって自殺者が出るほどでした。そういう面では大変な時代だったのです。

もう八十八歳になりますと、体力も気力も落ちてきました、思うようにいかないのです、みんなと一緒に散ればよかったのになぜ残ったのだろうかと、そればかりを最近思うようになりました。女房と二人きりで今生活しておりますけれども、まだ車を運転して、定期的に日赤病院に女房の

検査に通って、それが仕事みたいになっています。あとは犬の世話と庭の手入れ、それが私の毎日です。これからどうなるのかわからないけれど、米寿まで生きれば一つももう欲はないので、早く別れた仲間のところへ行きたいと思っていたところへ、中里さんから今度のこの話がありましたので、久しぶりにいろいろな古い資料を出して、もう一度読み直したりして、ありがたいと思っております。こうやって人と話ができることが私にとっては楽しみの一つです。

花は皆 散りゆくものと知りながら

散れずに残り ついに米寿に

しかしながら、何分とも昔のこと。記憶違いや間違った数字もあると思います。また、自分の置かれた位置からの経験が主体となった思い出話があると思います。

※ご本人からの聞き取りにより作成しました。



非核都市宣言平和事業実行委員会で体験を語る鈴木隆氏

戦争の追憶

緑町 中村 正英

小雪がちらつく冬の日など、コタツにあたりながらふと過ぎし軍隊時代の事を思い出す。あの凍てつくような極寒、手の皮がはがれるような食缶（飯を入れる大きなアルミ缶）の柄の冷たさ、防寒帽の耳垂れから吹き込んだ寒風で出来た耳たぶの水泡。現役兵で入隊し、初年兵教育を受けたハルピンやその後移ったハイラルは、零下四十度。本当に寒かった。

毎日の訓練もまた、骨身にしみた。初年兵教育の時は、青白い学生上りの私と違い、農村漁村のたくましい青年達と一緒に訓練なので、正に小説や映画になった「真空地帯」や「人間の条件」に出てくる兵隊生活そのもの、銃の手入れが悪いと言って殴られ、靴の手入れが悪いと言って靴の底をなめさせられ、行動が鈍いと言って戦友同士を対面に並ばせお互いに殴り合いをさせるなど、ひどいものであった。殴るのも平手ならまだいい。スリッパを使ったり革帯を使われると、ミミズ腫れになる。

更にノモンハン事件帰りという四年兵とか五年兵とかいう落ちこぼれの古年兵が班内をうろうろしては目を光

らせているのだから、たまったものではない。私などはその上、「お前ら幹候（幹部候補生）になるのだろう。

生意気だから今のうちに殴っておく」と毎日毎晩、理由もなしに鉄拳制裁を受けた。初年兵教育が終わった後、すぐに所属師団に動員令が下り、我々幹候を残して南方に出勤して行ったが、我々が教わった小隊長も中隊長も戦友もほとんど全滅してしまった。

教育生活も終わった頃、何と運のいい事に、私は本土決戦要員として昭和二十年五月、東京にあった高射第一師団軍医部に配属になった。そして三カ月後、終戦――満州に残った戦友達は皆、シベリアに抑留される運命をたどった。

戦時中は特にそうだが人間の生と死は本当に隣り合わせにある事を痛感した。

満州の思い出もいろいろあるが、終戦より一年以上前のある日、営庭の真ん中に戦車迎撃用の速射砲を、やぐらを組んで空に向けて設営している。一体何事かと尋ねてみたら、敵機来襲に備えてとの事。冗談ではない。超低空にでも来てくれなければ弾丸が届かない。戦局は厳しかったが、まだ少しは余裕のあった頃、これでは戦争は負けたと思った。事実、この時には既に関東軍の重要兵器はみな南方に持って行った後であった。そして私が

転属命令で日本に帰る時、釜山港で我々と入れ違いに満州に配属されてきた新兵の隊列に出会い、愕然とした。四十過ぎの召集兵で、一小隊で小銃を持った者は二、三名、背のうは背負い袋、よれよれの軍服に地下足袋姿、腰には竹筒の水のみをぶらさげ、全く無残としか言いようのない姿で、これを見て私は日本破れたりの感をさらに深くしたのである。

東京に戻った私は上野の科学博物館に屯する高射第一師団司令部配属となったが、東部軍管区司令部と一緒にいたので、米軍機の進入状況はよくわかった。大きな部屋の壁いっぱいには日本全国の巨大な地図があり、各地区の監視所のランプが綺羅星の如く点いており、部屋の周りには監視情報を受ける直通電話がずらりと並び、兵隊達が取り巻いている。刻々と入る情報に従って地図上のランプが点滅し、敵機の侵入状況が一目で分かる。これを見ながら情報将校達が「ただ今敵機十機、相模湾上を横浜方面に向けて侵入中。」等戦時中どなたもお聞きになっていた東部軍管区情報が流されたのである。

空襲が段々ひどくなり、当時我が家があった青山方面も五月二十五日に空襲を受けた。翌日、軍の車で戦災状況を視察に行った。表参道のケヤキは焼けただけ、青山方面は瓦礫の焼け野原。表参道と青山通りの交差点横にあった安

田銀行の前には、逃げ遅れた人たちが重なり合って倒れ、黒焦げの焼死体が山のように積み上がり、異臭を放っていた。

今でも残っている神宮の大燈籠の台座には人間の油がしみついていて、当時の惨状を物語っている。五月二十四日、二十五日にかけての山の手方面の空襲は都内最大で、千機の敵機により五千トンの焼夷弾（三月十日の五倍）が雨あられのように降り注いだのだからたまたまない。紅蓮の炎が地を這い、高熱の風塵が舞い散る中、業火は何もかも焼き尽くしてしまった。丸焼けになった我が家の焼け跡をほじくっていたら、小さな時から集めていた古銭がぐちゃぐちゃの塊になっているのを見つけた。

六十五年経った今でも手元に持っている。これを見るたびに思い出す。戦争は悲惨だ。二度と決してあってはならない。そして、この歴史は風化させることなく永遠に伝えてゆかねばならないと思う。

本土も戦場

境 大野田 武

○大空襲下の大阪の断片

あたりは妙に静まり返っている。空襲警報が発令されていると言っても空襲は毎日、いや、一日に何回もあることなのに……。この日、私らの本隊は大阪市城東区関目の隊舎から北郊千里山丘陵に向って、私と同僚の二名は食事当番として鳴野国民学校に残っていた。

空は晴れわたっている。ほどなく南の空に、黒く長い横一線を引いたように無数の機影が現れる。見慣れた光景だが何故かこの時背筋に寒いものが走る。空を覆って迫って来るのはB 29を中心とする艦載機・爆撃機の数知れぬ大編隊である。

私は学校の渡り廊下に畳を積んで作られた簡易な防空壕に入ったが落ち着かないので、校門近くの川の土手に掘られた防空壕に移った。中には職員ら十数名が蒲団を被って身を寄せ合っており、私もその裾の方に入れてもらった。が、その頃には、空気をつんざいて爆弾が落ちて来る音や爆発音があちこちに聞こえ、時々地震のように大地が揺れて土が頭上に落ちて来る。次々に落ちて来る音に神経を集

中させて唯ひたすらに祈るばかり、皆無言である。やがて、次第に落ち着いて来ると空気を裂いて落ちて来る音の高低や大小、質感等によつて爆弾の大きさや遠近の見当がつくようになる。ヒューンと高く澄んだ音のするは遠く、近い時には竹で編んだ箕から大豆でもあけるようなザーツと腹に響く音になる。

どれ程経ったのか、漸く爆撃も終わったようなので外に出ると、二階建ての校舎は真後ろに爆撃を受けて「く」の字にへし曲がり、両サイドの体操場と職員室とよつてかろうじて倒壊を免れている。昼の防空壕はどこかへ飛ばされて、大きな石がとんで来ている。すると、川沿いの土手を泣き叫びながら逃げて来る二〜三十人の一団がある。重油かコールタールのタンクでもやられて、それを被ったのか、顔も体も全身真っ黒、目ばかりがピカピカ光る異様な姿で走り去って行った。

○路上の蠟人形

町はどうなっているのかと私は一人外に出た。近くの私鉄の駅近くまで行くと、道の両側に半裸となった数十体の死体が並べられている。皆、蠟人形のように白く透き通った肌である。爆風でやられたのか傷痕はなく、あつても小さい。空襲が始まったので駅周辺の通行人等が一斉にガード下に逃げ込んだところを狙い撃ちされた

という。可哀相だなどという感情は起こらない。気がつく
と、ただひとりの兵士である私の後ろには「兵隊さん怖い
よー」と泣きながら何人も女生徒がついて来る。近くの
工場に学徒動員されたのであろう。私は無意識に腰の牛蒡
剣（ごぼうけん）の柄を強く握りしめ、皆これ程軍を頼り
にしているのかと思ひ、言葉もなかった。

日が落ち、隊に帰ろうとすると、校長は手を握り「もう
学校もこれでお仕舞いです。今日生死をともしたのも何
かのご縁、一期一会です。記念にお持ちください。」と言っ
て、物のない時大切に取っておいたと思われる「鳴野國民
学校」と記した箱入りの湯呑みを下さった。

関目の隊舎に帰ってみると、大阪城に隣接した陸軍造兵
廠に行った各隊は夜半になっても帰らぬところが少なく
なく、戦死者の搬出、あるいは破壊され生き埋めとなった防
空壕からの掘り出し救助に追われているという。中でも山
形であったか盛岡であったか、東北の部隊では、三十数名
が深い所に生き埋めになったということであった。

○樞の山と狂乱の遺族

一夜が明けて私たちの隊は、昨日の作業を続行するため、
早朝関目の隊舎を発つて千里山丘陵に向う途中、陸軍造兵
廠（ぞうへいしょう）の構内に入って目を疑った。立ち並
んでいた大工場の大半は破壊され、一トン爆弾を主とする

何十発の爆裂があったのか、まるで天と地をひっくり返
したような有様であちこちに大穴があき、新しい土が盛
り上がっている。そして出入り口に近い建物の、恐らく
資材の搬入・受け渡しにでも使われていたと思われる金
属製の広いカウンターの上やその奥には、天井近くまで
夥しい樞が積み上げられ、半狂乱の遺族らが泣き叫びな
がらこれを受け取っている。外は、次々に来る遺族らの
リヤカーや荷車で大混乱である。ここには徴用や学徒動
員を含めて数万の人々が働いていたと思われるが、一夜
のうちに、どのようにしてこの夥しい棺を調達し、電話
も切断された中で遺族らに連絡したのか、今もって思い
いたらない。

○むすび

これらのことは深く私の脳裏に焼きついて生涯忘れ
ることはないと思われるが、こうした体験によって、何
事もない平凡な日々がいかに大事なものであるかを身
にしみて思うようになった。子々孫々の世まで平和であ
れ。

志願兵の日々

境南町 高橋 進午

○志願兵として出征

当時は小学校の六年が終わったら、高等科というのが二年間ありました。武蔵野国民学校の高等科の二年が終わわり、それは今で言う中学校二年生のときです。昭和十八年十一月、十四歳のときに、私は海軍飛行兵に志願し、昭和十九年四月、三重海軍航空隊でいろいろな検査を受けました。丸い金網みたいな中でぐるぐる回されたりもしました。昭和十九年八月、土浦の部隊へ配置と決まるのですが、土浦には行かずに、すぐに山口県にある防府の海軍通信学校に行くことになりました。

出征の日は、そんなに見送りしてくれる人はいませんでした。「おまえは志願して自分で行くというからだ。」というのでした。家族が駅まで送ってくれただけでした。

私のおじさんは海軍にいたのですが「おまえ、あんな厳しいところへ何で志願するのか。」と言われました。おじさんは徴兵で海軍へ行ったので、とても厳しいということを知っていたからなのでしょう。

○軍隊の日々

防府の学校では、朝、起床し、点呼が終わると全員で練兵場のまわりを一周しました。一周すると四キロぐらいありました。それから食事でした。通信学校では通信の基礎を覚えさせられました。細かい無線理論など勉強しましたが、専門職でないので、勉強しても身に入りませんでした。

隊では、兵隊を徹底的に鍛えぬいていました。罰直という、一つの隊で、誰かが一人失敗をすると、それは隊の責任となるのです。「精神注入御棒」というのがありました。今で言うバットです。それで、順番に一人ずつ、おしりのところを殴られました。

上等兵になると、当直がありました。昼間は働いて、夜、そのまま当直になるのです。今のヘッドホンみたいなものをつけて、いろいろな方面からやってくる信号の傍受をしました。専門的ではないのですが、信号が飛んできて自分で分かったとき、そこを片仮名で書き取ります。例えばモールス信号の「・―」といったら「イ」と書きます。そして拾い聞きしたもの全てを清書して、当直の班長なり責任者に持って行きました。しかし、実際には、正規の専門の人もいて、別に信号を傍受していました。

何も無いときには、聞いていると、昼間の疲れでだんだん眠くなってきます。つい、うとうとしていると、当

直の責任者が来て、背中に「私は今、寝ていました」という張り紙をばつと張っていくのです。軽く張りますから分かりません。後で同僚にぼんと叩かれて、「おい、班長が呼んでいるぞ」と起こされるのです。班長のところへ行くと班長は「いや、もういいよ。おまえの用件は終わった」とだけ言うのです。「はい」と言っつて背中を向けて帰ろうとすると、背中に「私はただ今、寝ていました」つていう紙に気がつくのです。すると班長が、「疲れているからしよやがないけど、まあ、そういうこともあるだろう」とだけ言われました。「あまり、うとうとするなよ」ということだったので。当時の当直は試験的なものであったのでしよ。

食料は、蒸気釜で炊いたご飯でした。食事の心配というのは、ほとんどありませんでした。ご飯や味噌汁、おかずなどアルミの入れ物に入れたものを、炊事場から持つてきて、当番が盛りつけをします。食事にも、いわゆる罰直がありました。悪いことがあると、「おまえたち、今日は何をやったんだ。」つて言っつて班長が怒るのです。そして「今日は洋食だ。」と言っつて言っつて洋食というのは、まず班長が、「よし」と命令します。「よし、今日は最初にみそ汁」と命令すると、皆はみそ汁をきれいに食べる、飲むのです。次に「よし、おかず食え」と命令すると、今度、おかずだ

けを食べるのです。更に「よし、飯食え」となると、ご飯だけ食べるのです。しかし、軍隊の蒸気飯は、みそ汁と一緒にかき込まなければ喉に入らないのです。かま飯には、麦が入っつていて、普通の炊いた御飯と違っつて、ばさばさしつていました。

結局、ご飯を食べ切れないと残し、またアルミのおひつへ返すと、そこに炊事場の責任者がチェックをするのです。例えば「三〇一分隊、飯、残量あり」とメモをつけるのです。すると、前日のご飯が多かつたので、食べられなかつたという判断がされて、翌日はご飯の量が半分になつてしまふのです。これがいわゆる洋食という食べ方です。

○終戦の日

昭和二十年五月に横須賀の東京海軍通信隊に配置となり、終戦の一カ月前に第十五特別陸戦隊付になりました。陸戦隊は、横須賀の基地の中にある特別に編成された部隊です。部隊は衣笠の山の中に、通信線を埋める仕事で、一メートルぐらい穴を掘っつて、そこに通信線を埋める工事でした。

終戦の日は、やはり衣笠の穴を掘っつてある場所にいました。そこで、何か放送があるとのことで、部隊の中に一つ、携帯ラジオみたいなのが持ち込まれました。穴を掘っつていた人は、上官の命令で一カ所に集められました。

ラジオから流れてくるのは天皇のお言葉だというのですが、ただガーガー言っていただけで何が何だか分かりませんでした。そのときは負けたということがすぐ分かりませんでした。これから本土決戦に備えて、最後の戦いをするという内容だろうと思いました。

しかし状況が変わって、穴掘りはもう終わりだということになり、部隊に帰りました。するとそこではじめて、日本は終戦を迎え、負けたことを知りました。しかし、上官は「負けた」ということは言いませんでした。「終わった」ということだけでした。まだ血気盛りだった士官たちは「いや、もつとやるのだ。」というような、逆に反感心を持った人もいました。

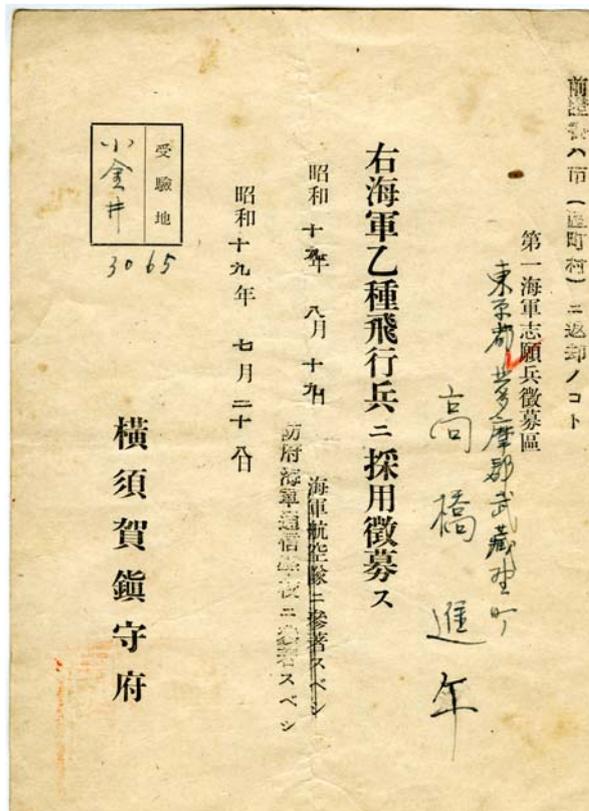
しかし、「負けた」ということで、翌日からはもう何もすることがありません。これからみんなを故郷に帰したりするようない、そういう手続も説明も、すぐにはありませんでした。どうしていいのか皆分からず、軍隊の中はいわゆるパニック状態でした。

それでも一週間ぐらい過ぎると、落ちつきが出てきました。もう日本は負けたのだから、みんなは自分の家へ帰ることになりました。帰る切符のために、自分の家まで帰る証明書が発行されました。故郷へ帰る人は皆、リュックなどにまとめた手回り品をいくつも持ち、ごった返した衣笠

の駅を後にしたのでした。

※ご本人からの聞き取りにより作成しました。

志願兵採用通知
(昭和19年
提供:高橋進午氏)



学徒出陣

境南町 大矢 与七

私は、第三期の学徒出陣として昭和十八年の十二月、軍隊に入りました。当時学生は、学校に入ると学徒動員で各工場へ派遣されました。体が病気だとかというのはやむを得ないことでしたが、「五体そろっていて、うろろうしているのは国賊だ。」とかで半ば強制で志願をさせられました。

父親はそうでもありませんでしたが、母親には「うちは子供が三人しかいないのに、いくら戦争といつても全員が戦争に行くことはないだろう。」と猛反対されました。兵役検査を受けると、甲種合格でした。合格すると早速、二月十日に、千葉県の柏にある陸軍第四航空教育隊に入隊し、初歩的な訓練を受けました。訓練はとても厳しいものでした。航空隊にいながら歩兵の訓練みたいなものでした。朝から夕までがっちり絞られるので、脱走兵が出ることもありました。そのときは非常呼集があつて、全員何時でもたたき起こされて、「搜索に行け。」とかやられました。やがて半年後、適性検査を受けました。適性検査には操縦の関係、整備の関係、通信の関係がありましたが、操縦の希

望が多く、六、七割の人が志望しました。私も操縦を志望して試験に合格しました。受かつてから、また半年ぐらい、基礎的な訓練を柏の第四航空教育隊で受けました。その後、整備は所沢整備学校、通信は水戸通信学校、私は操縦でするので、熊谷飛行学校に転属になりました。

熊谷での訓練は、今の言葉で言うインスタントの訓練でした。パラシュートの降下演習や赤とんぼという練習機で操縦訓練を受けました。しかし、ガソリンが無いので、十分に乗ることができず、私は二、三度しか搭乗の経験がありません。あとは格納庫でも、今で言う自動車のハンドル操作とか対処訓練、そういう訓練を受けると半年間で下士官として幹部候補生となりました。当時の規則では、下士官にならないと飛行機の搭乗者になることはできません。食事は、コウリヤン飯でした。コウリヤン飯というのは、モロコシの、麦飯よりもひどいご飯です。冬は火が焚けないので、前の日に焚いたものをそのままにするので、翌朝は氷のように凍ってしまいガリガリとなります。東京の間は胃腸が弱く、みんな下痢を起こしてしまいました。

幹部候補生になると、茨城県の鉾田にある飛行第四十五戦隊という戦隊へ配属されました。私が乗っていた機種は、新司偵（正式名は百式司令部偵察機）という偵察機を改造した襲撃機でした。B 29 に対する要撃戦隊で、訓練と言

つても、毎日毎日、格納庫での操縦訓練でした。新司偵にはエンジンが二つあり、機関砲を装備しています。操縦士と副操縦士と二人乗りで、後ろに乗る人はボタンを押して爆弾を落とすとか、あるいは機銃、機関砲の射撃手です。

操縦士には将校で飛行経験、千時間とか千五百時間やっているベテランの人が操縦していました。私は後ろで機銃手兼爆撃手でした。我々は、航空隊と言っても、襲撃機に乗ったのは二度しかありません。燃料がないので、下手に燃料を使わず、今度の襲撃に備えるということで蓄えるのです。飛行隊と言っても、本当に名ばかりでした。鉾田で外出しますと、「飛行機はほとんどん来ているのに、鉾田の航空隊の兵隊さんは何をやっているの。」と言われました。昭和二十年六月末ごろに、「何月の何時に飛行基地を出発して、沖縄の要撃作戦に参加せよ。」と特攻作戦命令が出ました。作戦命令が出て、一切外泊、面会禁止となりました。しかし出撃する飛行機が揃わなかったのです。名古屋の八日市にある三菱重工の工場から、飛行機が届くのですが、届いてきても、足が出ずに胴体着陸して駄目になったりで、出撃する飛行機が揃いませんでした。一次、二次、三次と出撃を送りましたが、すべて燃料を片道切符分だけ積み、敵艦めがけての攻撃でした。出撃の前の晩、出撃をする兵は第一装のだれも着たことのない飛行

行服を着て、飲めや、歌えやの大宴会でした。六、七月ごろなので、夕闇迫るちようど七時ごろ、ようやく薄ら暗くなり始めた時間に、出撃していきます。飛行場を二周、三周して行きますが、私達もいずれはああなるのかなと思うと、とても悲壮な気持ちになりました。

その頃一番嫌だった思いは、私はまだ十八歳なのに、親の反対を押し切って軍隊へ行ったこと。軍隊に入って、いろいろと絞られて、夜に月を見ると家のことを思い出すこと。それから、出撃命令が出て、六月初めに「爪を切れ。髪の毛を切れ。写真などがあつたら全部うちへ送るから支度をしろ。何か目ぼしいものがあればうちに送るから支度しろ」と命令されたことです。ほんとうにひしひしとした気持ちになりました。周囲から「兵隊に行け。」と進められ、嫌々ながら志願したので、職業軍人のような心の整理ができていませんでした。そのときはなかなか切なく、一抹の寂しさを感じました。

結局、鉾田を飛び立った最後の出撃部隊は七月の末です。あとは、飛行機が揃わず出撃ができませんでした。私は、第五次の戦闘隊という編制を受けていましたが、とうとう飛行機が揃わず、そのまま終戦の日を迎えました。

※ご本人からの聞き取りにより作成しました。

― 悲惨 ―

戦争は起こしてはいけない。またやられてもいけない

境南町 大工原 均一

私は、昭和十八年十二月に、二十歳で学徒出陣をしました。当時、満二十になると役場から通知がきて、体格検査、身体検査、健康診断を受け、甲・乙・丙という三種類の体格に応じ分けられました。甲種というのは、もう立派な体格です。それ以外に乙の一種、二種というのがありました。私は乙の一種でした。私はすぐに海軍に入りました。当時は、パイロットをできるだけ多く養成しようということ、すぐ適性検査を受け、土浦の航空隊に行きました。

そこで徹底的に精密検査を受けました。私はちよつと視力が足りなく、失格になってしまいました。やはり飛行科で、パイロットが地上でやるような勤務に配属が決まりました。

その後、鹿児島島の航空隊へ移りました。鹿児島島の航空隊は桜島湾の約一キロ四方を埋め立てたところにある、出っ張ったような飛行場にありました。海軍の航空隊は航空母艦が主力でしたから、なるべく小さい滑走距離で訓練を積むため、そういう飛行場だったようです。そこでは、我々

の地上勤務の教育を受ける部隊と、飛行予科練習生で、零戦の実戦の訓練を受ける部隊がありました。気の毒だったのは、その零戦の訓練で、週一回ぐらいは事故による死亡者が発生しました。機体を急降下させ、爆弾を落したり、機銃掃射をした後、機体を上昇させるのですが、操縦桿の引き上げが間に合わなく、事故が起きました。週に一人ぐらいずつは葬式をやっていました。飛行機の格納庫の中には、黒幕が置きっぱなしで、悲壮感がありました。桜島湾には船がいろいろ入っています。これら船を避けるため、雨の日とか、夕暮れとか条件の悪い時間に、訓練が行われていました。魚雷を発射する訓練も条件の悪いときに行われました。だから、天気の良いときは訓練が行われませんでした。とにかく厳しい訓練が行われていました。

昭和十九年九月、私は三重にある練習航空隊に配属になりました。予科練習生や、学生出身者へ教育を行う部隊での教官をやりました。入隊してきた十二、三歳の少年兵に「どういう動機で入隊した？」と聞くと、多くは「お国のために戦うつもりで入ってまいりました。」という非常に模範的な回答をしていましたが、中には「海軍では菓子が食べられるから、たくさん食べられるから入ってきました。：「これは涙を誘いました。毎日ではありませんでしたが、夜食か何か寝る前にはお菓子が出ていました。」

ある日、予科練で陸上戦闘の訓練がありました。三重県の山の中で、両方に分かれて遭遇戦を行うのですが、地形の説明をするときがありました。私は、学生時代に山岳部に所属していたので、地図を読むことができました。そこで上司が「貴様、地図が読めるのか。」ということになり、隊長の直属の取り締まり将校となりました。いわゆる甲板士官です。甲板士官は艦船の甲板全体を見回しして、「ここがだめじゃないか。」とか、「ここの整理が悪い」とか、そのようなことを言える将校でした。

海軍では、陸上でも艦上と同じ「デツキ」と言っていました。海軍では、外国語をよく使っていました。甲板のことを「デツキ」と呼びました。テーブルを「机」なんていうと怒られました。若手の将校の部屋は「ガンルーム」と呼んでいました。「ガン」というのは大砲のことです。ガンルームのその一番のトップというのは「キャプテン・オブ・ガンルーム」。ですから外出のときは、「ケップガン、外出お願いいたします。」といました。

昭和十九年の終わりのころには訓練の飛行機が無くなり、訓練よりも特殊潜航艇という、真珠湾攻撃でも使用された特攻用の潜水艦の基地作りを行いました。基地といっても結局、横穴を掘って上からわからない程度の基地でした。この作業を狙って米軍が機銃掃射の攻撃を行い、多くの予

科練生が死にました。

昭和二十年二月、私は横須賀の本土航空防衛司令部の配属となりました。配下には厚木航空隊や、茨城の百里航空隊、宮城の松島航空隊がありました。これら航空隊では、B 29 が来たとき、防衛のための飛行機を出撃させたり、日本沿岸に接近した機動部隊に特攻攻撃を加えていました。

茨城県の日立の沖合に米軍機動部隊が接近、艦砲射撃を行ったことがあります。日立には日立製作所の軍需工場があり、それを狙って、艦砲射撃を行うのです。我々は敵を退散させなければいけないのですが、昼間はとてもじゃなく、攻撃に向かつて、すぐ撃墜されてしまいます。そのため、夜間に特攻機の数機を出撃させました。しかし、敵も明かりを消しているのです、どれがどれだかわかりません。目で見える範囲で魚雷を発射するか、そのまま体当たりするしかありませんでした。私は、これをモールズ信号で聞いていたのです。戦艦に体当たりする信号は、戦艦は英語で「バトルシップ」というので「B」信号を打ち続けてきます。空母なら「エアクラフト・キャリア」なので「A」信号を打ち続けます。しかし、打ち続けるわけにはいかないので、やがて信号が止まるのです。

戦争末期になると、民間人でも爆撃でやられてしまう被

害となり、身近に死が来ていることを感じ始めました。何か、非常に澄んだような感じになりました。間もなく死が来るという気持ちです。これは、特攻隊で出る人たちの、その直前の感じとはまた違うものだと思います。特攻で出撃する人は、本当に自分の母親のこととか、家族のこととかを心配していました。

終戦直後、厚木航空隊では、最後の体当たりの攻撃をやるという司令部の副司令官がいました。連合国への降伏は、政府の陰謀で、天皇を巻き込んで負けたと決断した。これはけしからんということでした。海軍や陸軍の司令部を爆撃し、その後で機動部隊に突っ込んで最後の突撃を敢行するという計画でした。厚木基地から我々の司令部に「貴様たち、我々の計画には賛成だろうな。」と言って、血のついた将校がやって来ました。我々若手を集めて、「今、反対のやつがいたので切ってきた。反対の者は出る。この場で切つてやる」と言うのです。反対と言うことができず「みんな賛成です。」となるのです。

ところが説得工作が進み、最後は海軍にいた高松宮様から十九日の夜中ぐらいに一時間ぐらい厚木の司令部へ説得の電話が入りました。「おまえたち最後までそういうことをやるのなら、反乱の罪ということになるぞ。」という言葉が出たのです。それで、決起を断念したということ

す。

それから間もなく、我々は厚木基地を引き揚げました。占領軍のマッカーサー司令官が厚木基地に降り立ったのは、その直後のことでありました。

※ご本人からの聞き取りにより作成しました。

吉祥寺南町 林 治一

昭和二十年七月五日、勤労働員による埼玉の農村で、田植え作業の最中に召集令状を受け、さっそく渋谷の砲兵隊に入営（十八歳）。その夜、赤飯による歓迎と思いきや高粱飯で腹をこわし、更におびたらしい南京虫の洗礼、空襲警報で逃げ惑い右往左往の有様で第一夜が明けた。さっそく、多くの兵隊は渋谷方面に焼け跡の鉄屑回収に駆り出された。鉄屑を集めて兵器を作るといふ。私は砲手役に廻され、弾丸のつめ方、撃ち方など先任上官に手ほどきを受けたが、肝心のタマが在庫ゼロの状態だった。

十五日より藤沢の小学校教室に寝泊り一週間。馬の飼料用の草刈り。二十二日茅ヶ崎に移動、一般民家に四人宛分宿させてもらう。わが砲兵隊分隊四十数名、隊長は慶応大生で見習士官。靴は壊れたら修理不能につき使用禁止。当初民家より下駄を借用、その後申し訳ないからと三分の一の兵隊がワラ草履作りに専念、三分の一の兵隊は海岸へたこつぼ掘り（敵上陸用舟艇迎撃に備え、竹やりと手榴弾を持たす為のもの）。兵器委員を命ぜられた私の仕事は、朝夕竹の棒八十本があることと、ごぼう剣五本の確認だけ。

他に鉛筆削りに使う小型ナイフを二人に一個、いよいよの時のため戦友の首を切り合う為に持たされた。食器は木の板、汁椀は竹、水筒は班長のみ（ゴム臭く飲める代物ではなかった）であった。

大砲一門が八月三日茅ヶ崎駅に着く。全員で引き取りに行くも、砲弾なく、操作もわからず、神社の境内に置いた。このような軍隊で役立つと思われる品物が自宅にありそうな者は持つて来いとのことで、代わる代わる帰宅もできた。そのうち日本は降伏するらしいとの声が耳に入ってくるようになった。

八月六日早朝、相模湾防衛部隊の完結式が私ども砲兵隊の居る茅ヶ崎の丘の上で行なわれ、数千の将兵が集結。師団長物部中将閣下よりご訓示の旨のアナウンスがされ、ごく近隣にお住まいの方だと判った。そこへ米軍のグラマン戦闘機の来襲で、我々はクモの子を散らすが如く逃げ回った。ほうほうの体で自分の宿舎に帰り着き、驚いた。何と黄色い将官旗をつけた師団長の自動車停まっているではないか。師団長閣下は、庭先のしろうぎに腰を下ろし、幕僚と共に湯茶を召し上がっておられる。しかし、この時は、新兵の身として名乗り出るのはもつての外であった。

この日は色々な思いで眠られぬ夜を過ごした。敵の戦

闘機や上陸用舟艇に対し、我々が海岸に掘ったたこつぼ、靴の代わりのわらぞうり、竹やりや自決用の小刀の武器などで敵に勝てることができるのだろうか。

八月十三日夜、突如部隊長より呼び出しあり「特別の事情によりお前等を家に帰すことになった。十四日に衣服、靴等持って帰隊するように。」との話で驚いた。何がなんだかわからないまま、夜衣類を持って帰隊した。家では肺病にでもかかったのかといぶかしがられた。

十五日七時半隊長の訓示後、服、シャツ、靴、毛布等、官給品を全て返納。同僚との別れに切ないものがあるも、事情わからぬまま世話になったお宅に挨拶中、玉音放送となり、戦争は終わった。急ぎ列車に飛び乗り帰宅したのだった。

五日後、国立の母校の様子を見に行った。機銃掃射を受けた跡が随所にあり痛ましかった。学校の門柱を見て一驚した。「護東第二二〇五五部隊本部」とあるではないか。わが部隊の本部、してみると師団長・物部長鋒閣下はおられるかと胸高まり、校門わきに立っている衛兵に尋ねると、正に間違いない。お目にかかりたい一心で事情説明すると、中へ取り次いでくれ、すぐ閣下がお会いするからどうぞと私室へ通され、早速お目にかかることが出来た。私は閣下のお住まい（武蔵野市吉祥寺南町四丁目）のすぐ近くに居

住していること、師団完結式のおり、閣下のお名前がアウンズスされ嬉しかったこと、終戦前に帰郷させて頂いたお礼を申し上げ、その時の真相、どうしてここにおられるのか等々、いろいろお尋ねした。

師団長は「将来の日本を頼むべく幹部候補生を独断で帰郷させた。神奈川の部隊は全て即日県外に出ることが条件で此処へきたが、すぐ又移転することになる。くれぐれも日本国をよろしく頼む。」と仰せられ胸の熱くなることを覚えた。僅か四十日の軍隊生活ではあったが、国の未来と若者の将来を案じられた將軍に改めて感謝し、御礼申し上げお別れしたのであった。

「あの戦争の思い出」 特に引揚者の経験から

緑町 稲葉 和高

敗戦を朝鮮の黄海道海州府で迎えた。私は年齢十五歳で、旧制中学生であった。あの日は朝から暑い暑い日であった。ガアーガアーと雑音がひどく聴き取りにくいラジオから「天皇陛下」の御言葉を聴き、全身からスーと力が抜けた事を想い出す。敗戦の年の六月か七月であったか？朝からジリジリと暑い日であった。我々中学生は陸軍飛行場のあった「迎陽」（げいよう）基地で飛行機の掩体壕（えんたいごう）造りの工事に従事していた。

上半身は裸、手にはシャベルやツルハシ、流れ落ちる汗を拭うヒマも無い程の勤労奉仕であった。正午のラップを合図に握り飯を持って飛行場を見下ろせる近くの小高い砂山に一服の涼を求め登り、さて飯をと包を広げながらふと足元を見ると、何やら黒い小さな虫が二匹一対になって茶色っぽい玉を（ビー玉位）せっせと運んでおるではないか。然もその列はかなり長い。興味をそゝられること甚しい。暫くこの虫の列を眺めていたが遂にジツとしておられずその一つを摘んでしまった。瞬間グシャツと潰れ異臭がした。何とこの玉は人糞であった。周りで食事中の級友達からは非難ごうごう

だった。手を洗う水も無い砂山、貴重な水筒の水は絶対に費えない。手を洗える水は滑走路の向うに見える黄海の海水のみ、限られた休憩時間ではとても不可能なので泣く泣く砂で手をゴシゴシ、臭いの残る手で食事をする破目になった。この情け無い思い出は今もって忘れられない。

夕方寄宿先の義兄宅に帰り早速本箱から『ファーブルの昆虫記』を取り出してページを開くと何とあの虫が「糞転ガシ」の名で出ているでは無いか、然も玉を転がしている絵まで。アー本は読むもの、本箱の飾りでは無いと。「後悔先に立たず」とはこの事か。

敗戦の日を境に日本人の立場は激変した。昼夜を問わず街の辻々に群れた彼等の口から出る「マンセイ、マンセイ」（日本語ではバンザイ）の声は日本人に底知れぬ不安感を与えた。旬日して極東ロシア軍が侵入し暴虐の限りをつくした。彼等はシベリアの囚人により編成された囚人部隊と言われ日本人、朝鮮人を問わず被害は甚大であった。男勝さりの女性兵士も沢山いた。

肩に掛けた機関銃はバンバン発砲するし、日本人の家に入り込んできては電蓄、時計、万年筆など目ぼしい品々を全て持って行く始末。司令官は後に本国に召還され銃殺されたと聞く。むべなるかなと思つた。

我々日本人は常に動静を看視され緊張の毎日であった。従

って北朝鮮を脱出して、米軍占領下の南朝鮮への脱出計画など相手が日本人であっても簡単には口外できるものではなかった。それぞれ命懸けであったから。

散々苦労を重ね南朝鮮の両親の元に帰り、日本への帰国にそなえて家財の整理をはじめ、美術品や骨董品等は全て親しい朝鮮の方々に贈り、別れを惜しむ毎日であった。持ち帰りの無理な品々は、泣きながら焼去する始末だった。朝鮮の方々の中には「絶対守るから帰らないで残って。」と父と手を取り合って泣き、別れを惜しんで下さった人もいた。

十月の或る日の夕方全く突然、明朝六時に駅に集合せよとの通達が当局からあった。日本人家庭ではショックの中、帰国の準備をするのだった。我が家でも未整理の品々を大急ぎでオンドルや風呂の焚き口に放り込み、想い出深き品々との永遠の別れであった。

一睡も出来ず朝を迎えて、我々は住み慣れた家を出た。この家は七年振りに生まれた私を記念して建てられた二階建の洋式建物で、壁には一面ツタが生え、その中をリスが走り廻っていた。昼寝の枕元を走る足音で、眠りを覚まされる事もあった。

小さなリュックと手廻り品を腰のまわりにぶらさげて独自の軍人時代から在鮮三十五年、住み慣れたこの家を去る両親の胸の中は、いかばかりであったか、今は知る由も無い。

集合場所には、不安気な顔の日本人の集団、団長をまかさされた父の統率のもと指定列車に乗り込んだが、客車では無く貨物車であった。荷物を床に並べその上に坐り込んだが、天井がすぐ頭の上、狭く息苦さで母と病身の姉が心配だった。各地からの日本人を乗せた列車は釜山に向って一路山間の線路を走り続けた。

外は多分、風光明媚であるはずだが、窓の無い貨物車にはもちろん、電気とて無く暗い中で唯黙って坐って居るのみ。どの辺りを走っているのか皆目見当がつかない。そのうち、名も知らぬ駅に突然停車し、遠くの線路上にある別の列車に三十分以内に乗り移れと指示され大忙しで、荷物を抱え姉の手を引いて暗い中を走った。この為多くの人々が荷物を捨てた。

これらは機関士達の餌食となった。又或る時はトンネル内に停車して煙をモクモクと吐き出し、貨車の中に充満させるといういやがらせをした。元気な男性達が交渉に行くと機関手は「腹が空いて運転できない、何か食べる物を持って来い」との理不尽な要求があった。残り少ない食糧をかき集めて持って行き列車を動かしてもらおう始末。この様な事は釜山に着くまで再三であった。釜山港にやると列車が着き、米軍から食糧をもらった時の有難さと敗戦国民の悲哀をつくづく感じた。

疲れ切つて到着した釜山での我々の収容先は、港に建ち並ぶ倉庫であつた。狭い暗い貨物車に比べると正に天国であつた。

待ちに待つた引揚船「興安丸」が船尾に日の丸を掲げて、入港した。我々は僅かに残つた荷物を持ち乗船場へ、急なタラップを登り船内へ。皆今までの疲れはどこへやら。船室や甲板へと場所の確保に奔走した。我が家は父の先導で船首にある砲座に上つた。大砲を取りはずした砲座は六畳敷位か？四人にとっては又とない別天地であつた。船は一路鈴なりの人々を乗せ船足重く祖国へ向つた。

上陸予定地の舞鶴港が波の具合とかで入港できず、仙崎港へ入港するとの放送があつた。もう、ここまで来れば祖国の港であればどこでもと誰もが考えていた筈だ。

仙崎港では多くの人々が我々を御苦労さんと迎えて下さつた。船から下り立つた我々を誰彼の区別無く自宅に案内して下さつた。我家の四人も例外無く親切な方に案内されて行つた先は網元さんの家で、それはそれは立派な家であつた。居住地を出発以来の服装は汚れ、顔は洗顔もままならずホコリまみれ、母と姉が気の毒。腰のまわりに下げた小物等々、普段ならばそばに寄る事さえも嫌やがられる状態の我々四人を厭うことなく、それ風呂だ、それ着換えだと手厚いおもてなしに我々はただ、涙で応えるのみであつた。

何日振りかの入浴、手入れの届いた家人の着物、山海の珍味の並ぶ食卓、久し振りに見る白米の輝き、唯々感謝あるのみ。天国とはこれを云うのか。今は亡き両親も姉もこの時の温いおもてなしに対して終生感謝の念を抱き続けていた。約二十年前この地を旅行で訪れた際、ガイドの案内につれバスが仙崎に近づくに従つて、涙が止まらず周囲の乗客から奇異の目でみられた。終生忘れることの出来ない我が歴史である。

※地名、呼び方等は当時に従いました。

北朝鮮脱出記

吉祥寺北町 川越 貴美

今から六十五年前の北朝鮮脱出体験記です。

昭和二十年八月九日迄、父母と私は北鮮咸境北道・雄基邑(ゆうきゆう)の陸軍官舎に住んでいました。八ヶ月の短期間でした。そこは当時の満州、朝鮮、ソ連の接点であり、当時の日本国内の食糧の大豆(重要な食糧であった)を雄基港や羅津港から輸出する要所であった。

昭和二十年八月九日早暁、真昼のように照明弾があたりを照らし、爆音と機銃掃射の音に目が覚めて、三人飛び起きてアメリカ軍が来たと思っていたところ、電話がきて、血相の変った父が軍服に着替え、迎えの車であわただしく出立して行ったが、この別れが父(後シベリア抑留)との五年間の別れとなった。

残された母と押入れに避難していたが、洋間の窓ガラスに機銃掃射の弾が当たるし、震えつつ身支度を整える中、電話があり「一人一個のみ荷物を持って官舎の下にある共同の大きい防空壕に大至急集合せよ」との事で、その時ソ連軍が『日ソ不可侵条約』を一方的に破棄して侵入して来た事を知った。日本が原爆投下で弱ったところをねらい、

侵攻して来たわけである。今も怖さを感じるのだが、大至急荷造りをし、夏でも夜は温度がぐっと下るので、コートを着て、まわりを毛布で包み、帯をかけ、背負って外に出た。その我が家は小高い丘の官舎の一番上にあり、防空壕まで五分くらいかかる。そこまでよたよたと下つてゆく時も、上空を低くソ連機が旋回し、朝鮮人が住む粗末な家の屋根などがバサッと壊れたり、威嚇射撃のため低飛行をしていた。その下を低姿勢で這うように重い荷物を背負い移動している時に、時々爆音が近づくと、目と耳を手で塞ぎ地面に腹這い動かない。弾一発当たったらそれまでと思うと必死であった。

やっとたどり着いた共同防空壕には、それぞれの部隊の夫人、子供が集まっていたし、父の部隊の御夫人、子供さん達も荷物を持って不安顔で集まっていた。壕の中は真つ暗闇、懐中電燈のみ。兵隊さん二人の指示に従い、トラック一台に五十五人の婦人子供が乗り、早く早くとのことで、せつかく背負ってきた大荷物も全部壕内においてゆくことになる。人間で一杯で無理との事で、何しろ「ソ連兵が来るから早くして下さい」の言葉に、五人乗り込み出発……その壕で悲劇が起きていた。

東京育ちのお嬢様奥様の赤ちゃんがいらしたので、東京から耳の遠いばあやさんを連れて来ていらした。トラ

ツクが大分走った時、ばあやさんが乗っていない事がわかったが、後戻り不可能。夫人は帰国後、あらゆる宗教に携わっていらしたそうである。また、二歳くらいの生きた赤ん坊を道端に捨ててあり、目前に乾パンが山盛りに供えてあったり、病身の母上を娘さんが十メートルくらい背負い運び、また戻って荷物を運び、の繰返しをしていらしたが。乗せてあげたくともトラックもうっかり落ちたらそれまでのすし詰め状態でいかんとも出来る状態でない。走る途中、羅新港で日本へ大豆を運ぶ船は全部爆撃され、船の型で真っ赤になって黒煙もうもう、一寸先は見えない中を突っ走った。

満鉄の汽車が出ているらしいという事で、会寧まで行くのにトラックは戦場で使用するとの事で、それで案内人の兵隊さん二人は残ってくれて指図され、トボトボ行列になった。その行列に伝わったのは、南下は無理なので、白頭山で日本人が集団自給自足するとの事。今度はそちらに歩かされ木材を運ぶトロッコに乗って（日本人沢山）中途まで登ったところで、「日本人は下車するな」と命令があった。左右の沿線を見ると、大勢の朝鮮人が日の丸に墨を塗り、今の韓国旗を振り、騒いでいた。また一直線に下山し、北鮮の荒野を会寧へと歩いた。夜となり、急に放たれた牛が飛んで走って来たりしたが、眠るため、朝鮮の方が泊め

て下さり、じゃが芋などを買って食べた。

私は免疫がないので、すぐ南京虫にさされかゆみがひどく、爪からバイキンが入り足首がみるみる化膿して腫れて来て、大苦勞となった。足を引きずり、やっと会寧駅にたどり着いた。多くの日本人難民でごった返す中、順番でやっと牛馬用荷車に詰め込まれ、猛スピードで三十八度線突破、南下南下と汽笛もなくスーッと出発。

年頃の私が一番困った事はトイレ。母がかくす壁になつてくれたが、最高の苦痛だった。貨車が出る時は音をたてずにすーっと出るので乗り遅れたらもうおしまいである。

八月十五日に京城の一つ前の龍山駅で「日本敗れたり」の情報が入り、貨車の扉を開けると日本兵が剣突鉄砲を持って「日本はまだ戦える！」と叫んでいた。一路釜山へ南下し着いた釜山には、日本人が黒山のように集まっていた。沢山の汽船に順番通り静かに乗船してゆく。さすが日本人は立派だった。争いもせず声も上げず。

釜山港でも、一昼夜うずくまって待ち、船内もすし詰め。ただ私の足はパンパンに腫れてしまい、母の肩につかまりやっと歩いていた。

門司港でも、入港して一杯の船が待機中、機雷に触れて船が急に爆発炎上。戦争の真っ只中に生きている恐ろ

しさを痛感。その後、母と、小倉の従兄宅にころがりこみ、九月七日まで大変お世話になった。従兄が大八車に私を乗せてお医者様に何度も連れて行ってくださり、お蔭様で足が助かったのであった。もし二、三日遅れていたら「壊疽」になり、右足首から切らねばならなかったことであろう。従兄宅で母と二人、毎日蚊帳の中でぐったりと一週間ほどただただ眠っていたが、やっと私が片足を引きずりながら歩けるようになって、母の実家の鹿児島県薩摩郡宮之城町にたどり着いた。

鹿児島本線に乗車しようとしたが、空襲を受けて汽車は動かず、宮崎まわりの肥薩線でごつとんごつとんと、あせる心と裏腹に、やっときさ、着いたのであった。



慰問袋(提供:長屋恒久氏)

戦地の兵士を勇気づけ、また慰めるために、慰問文や日用品を入れて送られた袋。石鹸、キャラメル、絵はがき、便箋などの日用雑貨に、少年少女たちは慰問文や人形を入れたり、主婦たちによる千人針も納められた。

スリガ才海峡海戦 ― 駆逐艦「潮」乗員の手記

吉祥寺本町 長屋 恒久

昭和十八年二月一日、駆逐艦「潮」の操舵員として乗り込んだ私は、主にゼロ戦を南方のトラック島へ輸送する商船改造空母「大鷹」「雲鷹」などの護衛に従事しておりました。

戦局が急を告げた昭和十九年十月二十五日黎明、第二遊撃部隊の水雷戦隊として、第一遊撃部隊（第二戦隊 司令官に西村祥治中将 戦艦「山城」「扶桑」、重巡洋艦「最上」、第四駆逐隊「満潮」「朝雲」、第二十七駆逐隊「時雨」）に続いてレイテ湾泊地の米艦隊撃滅の為の突入作戦に参加した時のことです。

十月二十四日、午前二時五分コロン泊地を出撃しました。この出撃の時は半袖・半ズボンの防暑服ではなく、初めて陸戦用の第三種軍装を着用し、上着の裾をズボンの中に差し入れた上、脚絆も着けさせられました。止血の際の緊縛に使用する三センチ×十五センチくらいの板の端に穴を開けて麻紐を通した物をベルトに挟んでおくように指示もされました。応救員の三浦さんが私に晒を一反よこし、腹に巻きつけておけと言うので、必要の時まで預かる気持

ちで腹に巻きました。今まで一度も身に着ける気持ちにならなかった千人針を衣囊から出して腹に巻き、お守りもズボンのベルトに縛っておきました。

静かな海面を走っているせい、この日の午後に入ってから「今回は戦死するかもしれないぞ」との不安感が急に強くなりました。

他の人たちも同じ思いらしく、雑談の際に「靖国神社で会おう。」と互いに言い合っておりました。不思議とこの言葉を言ったり聞いたりすると、不安感が消えホッとした寛いだ気持ちになるのです。

その日の午後十一時。前方に吊光投弾を認め、配置につけの命令で艦橋の後ろの暗号室の左側の壁に設置された航跡自画器の作動テストを済ませました。この頃には強い緊張のせい、か恐怖心・不安感は一切ありませんでした。

第四接敵序列で進行したので、「潮」が左前方を、「曙」が右前方を先行し、「潮」の右後方から重巡「那智」・「足柄」・軽巡「阿武隈」・駆逐艦「不知火」・「霞」が単縦陣となつて進行する隊形です。

しばらくして筆前水雷長から「航跡自画器入れ。」の指示があり航跡自画器を作動させました。針の動きを見ると、記載される線が左回りを始めたのです。どうしたのかなと思っていると伝声管で「止めてよろしい」との水雷

長の声が聞こえたので、航跡自画器を止めて艦橋へ行き、艦橋右舷で待機しました。

この時はスリガオ海峡西口へ向かっていたのですが午前三時十三分、豪雨の為、水道の前方が不明となり左回りで反転して「阿武隈」の左側に並進状態となった時、突然「阿武隈」が機銃を撃ってきたのです。午前三時十五分頃で、速度は三十ノットくらいでした。

右横からの機銃の曳光弾の白い光の束が目の中めがけて飛んできて、間近になって上昇して通り抜けていく感じですが、味方の弾とわかっているだけに真に恐ろしい思いをいたしました。

信号兵が味方識別信号の「青青」を間違え「赤赤」を点灯し、慌てて「青青」に点灯しなおすなどもあって艦橋は大騒ぎでした。この誤射では前部煙突の右舷側の二ヶ所に径三十センチくらいの穴が開いただけで済んだのは幸運でした。

時事通信社発行 福田幸弘著『連合艦隊サイパン・レイテ戦記』二百二十一頁の『「阿武隈」を雷撃したのは百三十七号魚雷艇で、その目標は回頭中の駆逐艦「潮」だったのが外れて、軽巡「阿武隈」に命中したのである。』を読み、背筋が凍る思いでした。「阿武隈」には申し訳ないが、紙一重の違いで死なずに済んだわけです。

午前三時三十五分頃には、「那智」を先頭にした単縦陣の最後の「霞」の後に入り、スリガオ海峡をレイテ湾に向かい二十八ノットないし、最大船速で進行中でした。

右舷側の遠方に、全体を真っ赤に燃やしながら我々の進路に並行して浮かんでいる電信柱様の二つの物体がありました。「潮」が引き返して来た時も、左舷側の遠距離にまだ二つとも燃えながら浮いているのが見えました。右舷側に見た時、水雷長は「撃沈した敵のタンカーだろう。」と言われましたが、なんとも言えない嫌な雰囲気でした。戦後、撃沈された戦艦「扶桑」が燃えていた姿だった事を知りました。

引き返して来た時に、信号兵が大きな望遠鏡で見ている「魚雷艇が何かを撃っております。」と報告しておりましたが、これは魚雷艇が泳いでいる「扶桑」の乗員を撃ち殺していたのだらうと思います。海が静かなせいか速く走る感じがまったくありませんでした。

しばらくして、真っ暗な右前方に、突然戦艦の艦橋の左正面が浮かび上がり、その左右に物体がバラバラと落下している様子が瞬間的に見え、すぐ闇に消えました。七倍の双眼鏡で見ていた水雷長が「敵の戦艦轟沈。」と言った直後、右前の十二センチの双眼望遠鏡で見ていた信号長が「(戦艦)山城です。」と言ったのです。艦橋の中は、沈ん

だ霧囲気になりました。

午前四時四十分、命により反転しスリガオ海峡に向かい、午前五時四十分には海峡を出ております。「阿武隈」は、スリガオ海峡での被雷の影響で最大速度が十ノットになつておりました。

午前六時二十五分に敵魚雷艇一隻が、小癩にも機銃を撃ちながら向かって来たのです。魚雷艇の前甲板に固定してある機銃を、立った姿勢で撃ちながら向かって来たのですが、はるか彼方で弾が届く様子はありませんでした。

「潮」は全速で接近しつつ、前部の主砲を七十数発撃つたのに、至近弾も出ませんでした。魚雷艇は左右に移動しながら白い煙幕を張り、それに隠れて向こうへ姿を消しました。

「潮」には昭和十七年三月三日、マカツサル海峡南口付近で、浮上していたアメリカの潜水艦「パーチ六号」を発見し、初弾を命中させて撃沈、艦長以下五十九名を捕虜にした戦歴があります。その時の砲術長は特務大尉だったようですが、経験の量の違いがあったのだと思います。

明るくなって初めて気づいたのは、重巡「那智」の左前部の海面近くが、鰐が口を開けて泳いでいるように海水をこぼしながら動いている姿でした。レイテ湾の方ではまだ砲声がしており、重巡「最上」が島影から出たり入ったり

して戦っている姿がありました。そのうちに、マストが折れ曲がり、左右どちらだったかに傾いた姿で近づいて来ました。

それに対して敵の急降下爆撃機が襲ってききましたが、最初の敵機は「最上」の機銃で撃墜し、次の爆撃が命中して「最上」は停止してしまいました。後日、「最上」は「曙」の魚雷で沈めたと聞いております。

「潮」は「阿武隈」を護衛してカガヤンに向かいましたが、何回か敵艦載機の攻撃を受けております。

午前九時三十三分のグラマン十三機の攻撃を受けた時には戦死二名、重症四名を出しましたが、この時の状況が思い出せません。新設された機銃の給弾員の人たちだっと思ひます。この時の戦死者の方二柱はタゴロ岬沖で水葬した事になっておりますが、記憶にありません。

「阿武隈」と「潮」は、この日午後十時三十分、ダピタンに到着、警戒停泊をいたしました。

翌二十六日午前六時、「阿武隈」を護衛してコロンに向けダピタンを出港。午前六時三十七分、敵哨戒機B 24 一機と対空戦闘をするも被害なし。

午前九時十六分、敵P 38 二十機発見し砲撃をすると敵は立ち去った。

午前十時六分B 24 九機来襲、砲撃を始める。

「阿武隈」至近弾を受ける。

午前十時十三分、艦尾方向からB 24 九機来襲、砲撃を始める。被弾約二十発、至近弾数発。戦果B 24 二機撃破、被害戦死兵三名、重傷下士官兵四名。

「阿武隈」は直撃弾ないし至近弾数発を受け航行不能となる。

午前十時三十七分、「阿武隈」水雷砲台大爆発。機械停止、大火災となる。

午前十時四十四分、撃退する。右舷外板及び上部構造物二十数個の小破孔を生じたるほか被害なし。

戦果B 24、三機が白煙をはく。

「潮」が爆撃を受けたのは、「阿武隈」に爆弾が命中して動けなくなつてからです。私は艦橋後ろの旗甲板で、記録係の經理の小原さんと見ておりました。

対向するB 24が「阿武隈」の上空に行き爆弾を落とすと、「阿武隈」は周りを水柱ですっかり覆われてまったく見えなくなります。命中したのかと思つてみると、水柱の中から艦首が出て来るのです。この喜びを何回も経験しました。

何回目かに白い水柱の中に赤い色が見えました。赤い色が見える爆撃が何回か続き、大きな爆発があり燃え上がりました。これまで「阿武隈」だけを攻撃していたB 24の

編隊が初めて「潮」に向かつてきたのです。

対向してきた編隊が「潮」の上空に来た時には、B 24の機体に機銃の曳光弾が吸い込まれていくように見えたので、命中しているものと思つておりましたが、戦後、機銃員に聞くと弾が届いていないとの事でした。

B 24の編隊が「潮」の上を通過する時、右上の空から黒っぽい水滴のような形のがいくつも落ちてきて、それが右側の海面で爆発しました。それほど遠い距離ではないので破片が飛んでくると思い、小原さんと共に艦橋の中に入りました。

艦橋右側一番後ろの望遠鏡の腰掛に付いていた若い見張り員が、首の右側を手で押さえており、デッキには真っ赤な血がたまっていました。操舵長は右ももを右手で押さえて屈んでいました。すぐ舵を代わりました。この時は艦長以下艦橋の人々全員が鉄兜をかぶっているのです、操舵長が下に降りて行く時に、鉄兜を置いていって下さいと言いたかつたのですが、意気地なしと思われるのが嫌で、痩せ我慢をして黙つておりました。

首をやられた見張り員の左隣の望遠鏡の椅子にかけて見張りをしていた平山兵曹の鉄兜の正面に破片が当たり、鉄兜が割れましたが怪我はありませんでした。

爆弾回避の操舵をして、落ちてくる爆弾の爆発を待つて

いる時間は、頭の上で爆発したら鉄兜をかぶっていない頭が痛いだろうなどの思いで嫌な気分です。その分、海面で爆発する音を聞くと、スカツとし、何回でも味わいたいの思いに駆られるほどの快感でした。

速度通信機に付いていた柳谷上水も右足首を破片でやられており、志摩兵長が上がってきて交代しております。次席操舵員の持館茂安兵曹が操舵長の代理として交代に来たら残念だなと思っておりましたが、後に持館兵曹から「操舵長が交代に行かなくても大丈夫だと言うから行かなかったよ。」と言われ、幸運を喜びました。

艦橋で下士官一名、兵二名が負傷し、艦橋の下にある電信室では暗号長が手首に重傷を負いました。戦死者三名の方々の配置がどこであったかはわかりません。

救助した「阿武隈」の人たちも、私が心配したように、爆撃の水柱で潮が見えなくなる度に心配したり喜んだりしていたとの事でした。

「潮」では、昭和十九年六月に前部砲塔と艦橋の間の上甲板左右の端と、艦橋後方の上甲板左右の端に二十五ミリ単装機銃計四機を設置したので、B 24が前方から近づく時、これらの機銃を撃つ音はまぶたがピクピクと動くほどの煩さで、艦長の声はまったく聞こえません。艦長が右手を上から下に下ろした時には「面舵いっぱい急げ。」と判

断して舵輪をぐいぐい力いっぱい回しました。

操舵室が艦橋の下にある新型駆逐艦だったら、艦長の指示にすぐ反応できず、舵の取り遅れで爆弾は避けきれなかったと思います。

森田衛少尉は、私の斜め前の椅子に腰掛け伝声管に口を近づけていたので、機関科との連絡に当たっていたと思います。

私の視野の中には、このお二人の他、信号科の小田上水がいました。普段は気が利かない男と思われていたのに、艦長と同様に飛行機を見ていて「艦長、面舵です。」などと言うのには驚きました。艦長のほうも「おおそうか。」と言つて、その通りに操艦されるのです。このように柔軟性もある艦長のお陰で、命が助かったのだと思います。

私が舵を代わってからには全ての爆弾をよけられました。至近弾もなく、被害は皆無でした。操舵長は、舵輪の表示と舵角の表示を七度以上に広げると舵故障になると信じて、舵輪を注意しながら回したので、舵の取り遅れで至近弾になり、自分も怪我をされたのではないかと思います。

私が馬鹿力を出し、夢中で舵輪を回したのが良かったと思っております。この約一カ月後の航海中に、舵取機の油圧を発生させる電動機のベアリングが異音を出す舵故障になり、人力操舵に切り替えてその間に機関科の人がベア

太平洋戦争を偲び

吉祥寺北町 川合 仁

戦後、昭和三十三年に都内中野区より移住し、今日に到っており、約五十二年間の長きに亘り家族と共に平和な生活を送っております。

顧みれば戦争勃発後の昭和十七年二月、現役満期除隊（予備役編入）間もなく臨時召集令状が送達されました。その為軍属として埼玉県所沢市の陸軍航空士官学校の直属上司にその旨を報告したところ、令状は入隊しても内地留守部隊の補充教育隊員の助教として勤務することになるであろうとのことでした。ところが、中野区にある東部八十八部隊に入隊したところ、戦地編成部隊の中の独立通信部隊の班長として、直接、部隊長により任命されました。その結果、部隊は直ちに編成を終り、移動のための準備活動に入り、通信器機の整備並びに通信施設補給訓練等に周到な準備点検を行い、出動準備を万端に整えて、次の命令を待ち、先ず広島市の西部八十八部隊への移動が発令されました。

広島への移動後は引き続き、宇品港より輸送船にて台湾高雄へ直行し、上陸後、台南市内への移駐が決まりました。

移動後は戦闘部隊に供給する通信器機の整備は勿論補給訓練、予行演習を含め日夜の戦地訓練が終始行われ、準備に遺漏無きを期し、出動準備に失敗の恐れ無きよう、頑張り続けました。

やがて三月中旬になると仏領印度支那半島への移動が発令されました。輸送船により高雄港を出港し、現在のベトナム共和国ハノイ市に上陸し、引き続きサイゴン市に駐屯が決まりました。サイゴン市はフランス租界もあり殖民地としては繁盛し、西洋風の街並を保ち常に明るい近代的な街づくりにより親近感を覚えたものです。

ところが同年五月には部隊の移動命令が発令され更に南進し、マレー鉄道により、シンガポール（昭南市）へ進駐することとなりました。ところが、突然タイピン市に下車し、私達部隊も戦闘部隊と共同戦線を行い、英軍のゲリラ部隊を殲滅すべく、命令が出され、自らの身を守りながらもジャングルに突入し、常に英軍との戦闘が繰り返され、師団司令部に所属する部隊への兵器、特に通信器機の補給が絶対必要欠かせないとのこと、単独で補給業務に全力を尽くすことが日常の業務となりました。

昭和十七年十一月以降、私達非戦闘部隊もゲリラ掃討作戦に参加し分隊毎に行動を開始し、重火器を持たないジャングルで迫撃砲や手榴弾の飛んでくる中で反撃を繰返し、

自己の任務を果しつつ、寝食を忘れさまよいました。既に携帯口糧も無く水だけで飢えを凌ぎつつ、敵の去るのを待って砲弾の始末や、草木の焼跡が残る生々しい中、重軽傷を負った戦友の手当や繃帯所（ほうたいじょ）への輸送に多忙を極めました。

昭和十八年一月にはゲリラ掃討作戦に参加し通信戦機の補給中タイピンより五十キロ離れた地区でトラックで進軍中、突如ゲリラ部隊の砲撃に遭いました。身をかくす余裕もなく、我が身に迫撃砲の破片が左眼の瞼をかすめ、左眼から血液が流れ、戦友に抱えられながら、繃帯所に運ばれ手術を行い、五針程縫う破目に遭いました。傷跡が今でも残っております。

昭和十八年五月には突然、第七方面軍司令部通信課への転属命令が発令されタイピンよりシンガポールへ移り、永年生死を共にした戦友達と別れを惜しみました。私は営外居住となりシンガポールの植物公園に近く総軍司令部や第七方面軍司令部の一角に居住することとなりました。

同年八月には「マンダレー作戦」に参加し、現地マンダレーへの通信機器の補給、部品交換などで第一陣に先輩である、Y曹長が重爆撃機に搭乗し、シンガポールのチャンギー空港より出発したが、途中敵機米軍機の襲撃を受け遂に帰らぬ人となりました。そのため第二陣は私が選ばれた

役を荷うため重爆撃機に搭乗し、再びマンダレーに飛び無事任務を終え帰還することができました。

昭和十九年三月、シンガポールも毎日アメリカの諜報活動が激しくなり、B 29爆撃機も昼夜を問わず飛来し、空中から「日本兵に告ぐ」ビラ、チラシ等が頻繁に落下されました。

同年十月には司令部内の移動により、私以下三名がスマトラ島南部パレンバン、更には中部パダン、北部メダンへと移動し、石油補給部隊に同行し島内全域を行動しました。昭和二十年三月スマトラ島での支援活動も終了し、シンガポールに帰還しました。

同年八月六日には広島市への新型爆弾の投下、更に九日には長崎市への新型爆弾が投下され、何れも原子爆弾であることが米空軍のチラシに依って明らかにされました。更に、八月十四日には司令部参謀部内では高級将校の自決があり、翌十五日には連合国軍による降伏文書に署名されたとのことで、即日、賀陽宮殿下が紹書下達のためシンガポールに到着されました。翌八月十六日には英軍司令官により日本の将兵に対し武装解除の指令が出されました。

当日英軍の武装解除により各人が所持していた兵器や私物の軍刀及び拳銃まで返上し、腕時計まで剥奪されました。更には長期に亘って、大切に保管していた食糧（米、

味噌塩砂糖及び副食品等)すべて英軍に提供しました。遂に身の廻り品は毛布一枚と飯盒のみ許され、更に戦争中に記録された手帳も没収され、悔しくて、涙が止りませんでした。八月十七日からは捕虜として分隊編成が行われ私も分隊の副長としてその任に当ることとなりました。そのためシンガポール市内の道路及びマンホールの清掃を命ぜられ、日本が戦争中汚染したことを理由に、約半月に亘り、灼熱の太陽の下で昼夜の作業に隊員の中には倒れる者も出る始末、如何に苦しんだか想像以上の苦難でありました。

九月初旬にはシンガポールより小船に乗り、インドネシア領の無人島に島流しとなり、南レンパン島でのジャングル生活が始まりました。ゴムの木や雑草をかき集め、寝床を造るため全員夜遅くまで設営作業をすすめました。

英軍からは朝八時から夕方六時頃まで英軍の監視下による開懇設営等の作業が連日行われました。英軍からの食料の配給は一週間に二回程口糧が配給されたが、極めて量が少なく、生きてゆくためには島内二万人の捕虜が、ジャングルの中の木の実(芽)を探し歩きました。木の芽が出る間もなく、遂にゴムの実等をあさって歩くのが深夜の仕事となりました。私は昆虫や飛んでくるバッタ等を捕り、食糧の一部にして生きてゆく毎日でした。

島の中では栄養失調や水ぶくれの身体となり斃(たお)

れてゆく隊員が目立っており、他人ごとでは済まない状況にありました。その為隊員の中には英軍の口糧の山をスコールのある夜中に襲撃するという隊員もおり、発見されれば銃殺されるのを覚悟で実行した隊員もおりました。昭和二十一年四月には漸く旧軍属や婦女子が内地送還されるとの英軍の指令が出されました。同年十月に入ると待ち続けた私達旧軍人最後の送還が決まり、英軍の命令が夢のようで、半心半疑の気持も実現に向って生涯忘れることのない思い出となりました。十月初旬には待ち続けた送還船が本国より入港しました。

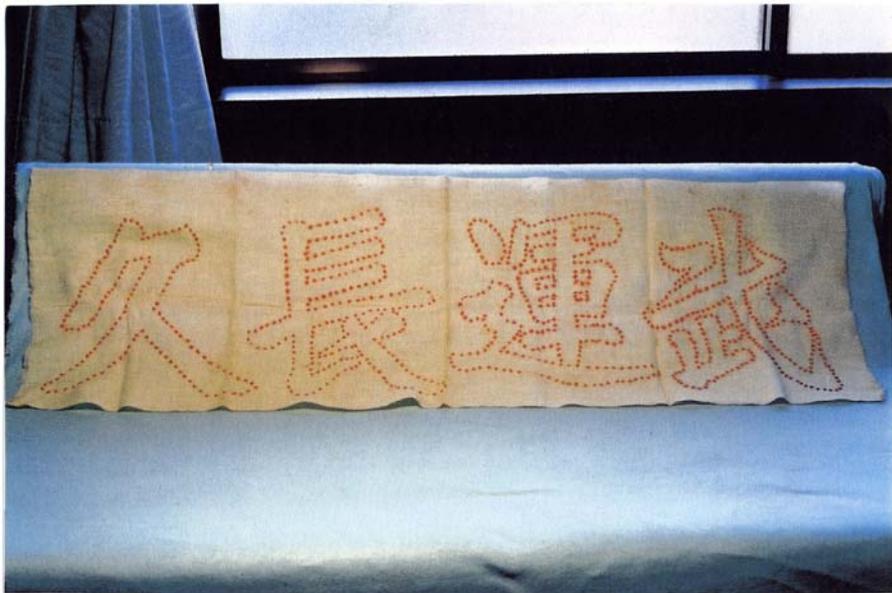
貨物輸送船でいかだを利用して、分隊毎に本船を往復し乗船が完了しました。私達の分隊は戦病死等の者を除き約三十名程が生命を保ち乗船できました。輸送船の中では船倉から甲板の直下まで四段階に仕切られ、私達は船底で寝食を過ごした次第であります。船の中で日本米の夕食が配給され、生き返った思いで食事ができ感無量でした。

一週間程で祖国日本への上陸となり、上陸は英軍が駐留していた広島県大竹港に上陸しました。先づ英軍の隊員による身体検査がありました。監視されながら、日本の復員局の検査と軍票の引き渡し事務を行い、手続きが終了し、帰還旅費が支給され、直ちに解散となりました。

解散後は各人毎に故郷に帰るため東京までの乗車券を

購入し、大竹駅より故国の風景を眺めつつ、東京駅に着き、山手線、西武線を乗り継ぎ、埼玉県所沢駅に到着し我が家に無事帰還することができました。さて家族はどうしているのだろうかと案じつつ、ようやく丸五年ぶりで会える嬉しさを一杯でした。

以上の戦歴を経て、我が国の歴史に全く経験したことの無い敗戦と云う憂き目に遭い、戦争が如何に人類にもたらす悲しみとその愚かさを感ぜざるを得ない次第です。



千人針「武運長久」(提供:志賀礼子氏)

鎮魂と回想 — 小豆山への遠い道 —

あずきやま

桜堤 落合 正道

昭和二十年八月九日、ソ連軍は日ソ不可侵条約を一方的に破棄し、満ソ国境の前線を越えて侵攻してきたため、専守防衛に徹していた関東軍は、北方の防人（さきもり）として激戦を展開した。

特に東部方面にあった牡丹江重砲兵連隊は、日本に移転の準備中であつたため、二十四センチ榴弾砲八門中、僅か一門で、また、独立重砲兵第一中隊（隊長は一カ月前までの直屬上司）は十五センチ加農（カノン）砲二門中の一門で砲撃し、戦車数十輦を擱座炎上させたが、遂に砲潰えるに及んで大砲を破壊して、全員肉迫攻撃を掛け、終戦の日まで牡丹江市へのソ連軍の侵入を許さず、後方の鏡泊湖陣地に布陣した我々第二防戦の戦場化を食い止められた命の恩人であり、また、二十万人余の居留民の生命財産を擁護した。

この時、師団砲兵司令部がおかれたのが表題の小豆山である。小豆山は海拔六百メートルで二つの頂を東西四キロの稜線で繋いでいる。戦闘中、ソ連軍の砲撃により真つ赤

に焼けていたので、地元では火焼山（かしようざん）とも呼ばれ、今でも戦死した日本軍人の白骨が出るそうである。私はかねてからこの地を訪れ、慰霊祭を行なうとともに、あわよくば遺骨の若干でも収集出来ないであろうかという思いに強く駆られたのは、十年も昔、朝日新聞の「尋ね人」欄で生き残りのH氏を知り、その情報を得てからである。

現在、遺骨収集の認められない中国ではあるが、このたび生き残りの皆さんと日中友好訪中団を結成し、五十回忌の法要を営むことができた。以下はその際の記録である。

平成六年八月五日、北京発九時の中国北方航空機YS 11は、定刻十一時に牡丹江空港に着陸した。昼食もそこそこに、一行三十三名はマイクロバス二台に分乗し、十二時四十五分目的地の穆稜（むーりん）地区小豆山に向つた。国道（通称牡丹江街道）は二車線未舗装の凹凸道で、トヨタ製エンジン搭載のマイクロバスが時速五十キロで突っ走る。時々チップを満載した大型トラックが左右に大きく傾きながら対向車線に現われ、すれ違いざまにかぶさるように窓辺に接近するので、車内に驚きの喚声上がる。

途中、磨刀石（まとうせき）を通過の際には、予備士官学校の生徒により編成された肉迫攻撃班が、ソ連戦車に勇敢に体当たりし、散華した幹部候補生（岸壁の母のご子息、

端野新二候補生もその一人)の冥福を祈る。

一行は体力に自信のない者十五名を車中に残し、十八名が長靴・レインコート・傘の出で立ちで一団となり、一路小豆山を目指した。大陸特有の沛然(はいぜん)たる大雨を衝いて歩む道路は、至る所にぬかるみができて、思うように歩けない、慰靈行に相応しい強行軍となった。途中、一軒の民家に入り、Cさんという六十歳がらみの農夫の方が案内役を買ってくれたことが幸いした。

やがて、数件の部落を幾つか過ぎていくが、前方の小高い畑に阻まれ小豆山の姿が見えず、遙か彼方まで耕作畑と泥道が続く。再び稜線に來ると、突然緑一色の小豆山が眼前に現れた。手前を横に流れているのが柳毛川(りゅうもながわ)、その向こう側に二車線道路が並行して走り、まっすぐに切り立った山の右側が小豆山で、左側の高い山がN少佐の観測所跡であろう。その左側の低い山との間を沢が奥まで伸びており、附近には十軒ほどの部落があった。用意した当時の戦闘要図では、まさしく砲車と蛸壺陣地の跡と思われた。

時計は既に六時で夕闇が辺りを包み始める。一刻の猶予もならないので大忙がしで、供養の品を山裾の木陰、草叢の中に並べ、線香をくゆらせて故国の水を捧げ、清酒や野の花を供え、念仏を唱える。私もN少佐の愛唱歌「国境の

町」をハーモニカで演奏した。哀愁を帯びた曲が、山あい

に静かに流れる。いつの間にか、遠巻きに村人達が物珍しそうに眺めている。一行は疲労の色も濃く、山頂への夜道は危険であり、涙をのんで引き揚げを決断し、明日に予定される北林台(牡丹江街道の側)における合同慰靈祭に委ねることになった。

住民の方々には、持参した食糧や雑費を差し上げ後事を託したが、現地の人たちが戦場に遺った霊の気を感じ取って鎮魂を志していたところに、我々が現れたからか、非常に友好的であった。

闇夜に声を掛け合いながら、石につまずき、ぬかるみに足を取られ、時々転倒しながら全員歩きに歩く。

迎えの声とともに、小型トラックの灯火が近づいて来た。全員歓声を上げて無事帰着したことを喜ぶ。時に午後八時四十五分。牡丹江市の北山賓館に帰り着いたのは深夜であった。

玄海を若き日越えぬ雲の峰

隊長の散華の小豆山(やま)に夏の草

読経にみ魂も答えん青嵐

鈴 峰 (俳号)

従軍看護婦としてフィリピンへ

吉祥寺南町 西山 清子

この度「戦争体験を語り継ぎましょう」という資料募集の広報を見せていただき、私は今年八十四歳、少々ぼけて足もままなりません、「戦争の悲惨さ」「平和の尊さ」をしみじみ感じている一人でございます。

私が女学校を卒業する頃は、戦争続きで、毎日の様に軍歌や歓呼の声に、出征される兵隊さんを駅までお見送りさせてもらい、その姿を見て私もお国のために何とかお役にたきたいと考えた末、赤十字の看護看護婦になりたいと思いい両親にお願いしましたが大反対、かくれて試験を受けてきびしい教育の末卒業、「赤紙召集令状」を頂き、激戦地フィリピンに出征いたしました。必ず戦争に勝って凱旋して宝冠章という勲章を頂いて、その時こそ親に喜んでもらえると思っていると信じて出征いたしました。

途中千五百トンの小さい船で臓物を吐き出す程の船酔いに苦しみ、マニラの港にやつと到着、と同時に日本の輸送船が米軍の魚雷攻撃を受け、血だらけの日本の兵隊さんがぞくぞくと運び込まれる様子を横目で見ながら、クラーク飛行場近くの兵站病院に到着。その頃から飛行場への攻

撃が激しくなり、夜になると負傷した兵隊がぞくぞくと運び込まれ、足の飛ばされた者や顔に大やけど、見るかげもない兵隊、すでに死んでしまっている兵隊、苦しそうにうめく断末魔の声、重傷患者はあとまわしでほっておかれ、常識では考えられない現場でした。

久しぶりに日本の女性を見て、声を聞いて、母や妻子を思い出すのでしよう、私達の手をしっかりとにぎりしめて名を呼び、「お母さん」と一言叫んで死んでいった兵隊さんは何人いたかわかりません。

夜が明けると、あざける様な敵機が赤十字マークは無視して、爆撃してきます。何の抵抗もできない病院はひとたまりもありませんでした。病院の中は悲しい出来事がくり返されていました。食糧も薬もなく、食べる物は原住民が残っていた掘り残しのさつまいもを掘ったり、鼠や蛇を見つけては火の上で焼き、いわしの缶詰の空き缶で油虫を真つ黒く焼いてはさつまいもと一緒に食べました。口に入るものは何でも食べました。栄養失調の同僚の中にはお腹がばんばんにはれ、目だけぎよろつかせ、「お茶が飲みたいたい」「白いご飯が食べたい」と言って死んでいきました。鼠や油虫はどうしても食べられなかったのです。

死期の近い兵隊さんが、巡回から戻ると死んでいました。処置しようと毛布をはぐと、死体の太ももの肉がえぐり取

られて、怪我を負ってはできないような、ざくろのような傷口を見せていました。普通では考えられない状況の中、追いつめられた三人の患者はボツボツと「腹が減ってたまらないので・・・」。私は驚きのあまり、三人はどんなにつらかっただろうと思うと、軍医には報告出来ませんでした。三ヶ月も過ぎた頃、その三人は一人、一人ずつと亡くなられました。

夕方、巡回が終わる頃には、毎日のように三人四人と、多い時は十名も死んでゆかれました。その死体を、私達救護班は一つの担架に二人ずつ乗せて近くの山に運び、月の光を頼りに帯剣で穴を掘って埋葬するのです。とてもこわくておそろしくて、処置した日は一晩中眠れず、私共救護班も死ぬ思いでこれは一番つらいお役でした。

米軍が上陸してきた事を聞いた私達は、歩ける患者の手を引いて、山の奥へ奥へと歩きました。重傷患者はどうする事も出来ません。行くも死、残るも死だとすれば、軍医の命令で衛生兵達が昇永水（しょうこうすい）を注射して息を引き取らせる事になりました。歩く事の出来ない患者さんは、今、自分がどうされるか本能的にわかるのでしょうか。「頼む、歩くから連れて行ってくれ」と衛生兵にしがみつき、両手を合わせて押んだそうです。

聞かされた私達は戦争のむごさに目を腫らし、行くあて

もなく奥へ奥へと入って行きました。うじのたかった日本の兵隊さんの死体が道に転がっていて、川があれば川に流し、山があれば穴を掘って土をかぶせました。血のにおいをかいだ大きな山ビルが木から落ちてきて私達の首に吸いつき、その痛さも忘れられない出来事でした。深い崖にへばりつくような細い山道、おそらく、昔から住む原住民だけが歩いた道を、私達は声もなく、ただもくもくと足を運ぶだけでした。近眼の同僚がよろめく足を踏み外し、大きな悲鳴を上げて転落し、その途中の木の枝に宙吊りになり、もう動きませんでした。凱旋を夢見て生きてきた同僚を引き上げる事も出来ず、置き去りにする他、どうする事も出来ませんでした。あの山の中で一人残されたままのことを思うと、申し訳なさでいっばいでございます。

米軍機が撒いたビラで終戦を知り、敗戦国日本の浦賀に帰ってまいりました。日本を出発した時十二名だった同僚も六名に減り、それぞれ任務をしながら帰国いたしました。何度も何度も夢に見た母、白髪のおふえた母に抱きついて泣きました。

ここまでが私の戦争体験の一部でございます。

私の体験した戦争という地獄絵は何だったのだろうか、こんなにむごい戦争という体験は世界中どここの国でも終わりにしなくてはならないと、ひしひしと感じております。

ただ今は、戦死した戦友一人一人の顔を、姿を思い出し、
貴女の犠牲のお蔭様で、今、日本は平和で幸せです、どうぞ
安心してください、ありがとうございますと、毎月ご
命日には一人一人戒名を読み上げて、ご供養させて頂いて
おります。

フィリピン・ルソン戦線について

中町 船木 兼吉

私は昭和十八年十二月末、濠比派遣軍補充要員として宇都宮三十六部隊に召集され、翌十九年四月、下関港より南方に向け出港、約五十隻の大船団であった。特設航空母艦など海軍の小艦艇に護衛されていたが、バシー海峡を通過中、夜明け前に後続の輸送船、航空機を乗せた船が敵の潜水艦により沈められ、目の前で沈んでいくのを見て、なんといってよいか言葉がなかった。私達は、無事マニラ港に上陸、兵站（へいたん）宿舎に入り次の船の便を待つことにしていた。しかし、戦局が悪化して次の船便もなかなか到着せず、とうとう私達五百名位はマニラの各部隊に配属になり、散り散りばらばらになってしまった。

私は、十四軍野戦兵器廠に転属になり、苦勞が始まった。十月に入り、毎日のようにグラマンの空襲が始まり、レイテ島のマニラでは港もずたずたになった。満州各地から続々と送り込まれる兵士は、物資陸揚げでも戦争をしているのと同じであった。私達の部隊も、応援のために出動した。今でも脳裏に焼きついているのは、何回も港に激励に来た十四軍の司令官、山下將軍の勇姿であった。六尺有余

の大男、相撲で言えば横綱の様な体格の大將軍であった。何回か訓示を受けたことがあり、忘れることが出来ない。全責任を負って比島の露と消えた、論じても余りある大將軍ではなかっただろうか。

一月、マニラを撤収して、バギオに移動した。途中一月八日、リンガエン湾に敵の大部隊上陸、艦船合わせて八百隻の大部隊と聞いた。私の部隊はバギオを四月まで警備して、毎日P 36やグラマン、イギリスのスピットファイヤなど戦闘機の空爆を受けていた。食べ物はなく、毎日住民の作ったさつまいもを掘って露命をつなぎながら、米比軍と戦闘を続けており、我が方には武器のような物は何もなかった。途中、山の中では木にもたれ、そのままの姿で死んでいる兵士がいたる所に散見された。飢えと病気で死んでいったのだと思う。

私達最後の戦闘は八月十日だった。山の上に陣地を構築、各人蛸壺を掘りその中に入って待ち受けた。自走砲十連発のはげしい砲撃の後、米比軍、主に比軍が腰に自動小銃で立ったまま山上の私達に向かって雨のように射撃を浴びせてきた。下から上に向かって撃ってくるので、蛸壺にいる私達の頭の上をかすめて行った。夕立のような音であった。私達は、手榴弾を各人四発から五発を、敵が十メートルくらいに近づくと一斉に投げ、敵はその激しさに圧倒され後

退して行った。私も三発、敵の顔をよく見て投げ、敵の逃げるのを目で確かめ、安堵の為か腰が抜けたようになった。その後、敵の様子がおかしく全然攻めてこないので変に思っていたところ、八月二十日頃になって、どこからともなく戦争は日本が負けて終わったという話が伝わってきた。山の上の陣地で何とも言えないほど力が抜けて、夢遊病者のようになり、九月の末に山を降り武装を解除され、収容所に向って山を降りて行った。

北部ルソン島には鉾山が多数あって、とりわけ銅山がいたるところにあったように思う。私たちもマンカヤンという銅山に入って約二カ月間、敵の空爆を逃れていた。その鉾山で働いていて退去が遅れた作業員のご家族のご苦労は、並大抵ではなかったように思う。一緒にアパリに向けて退去する親子と二日くらい同行したが、小さいほうの子供が途中で病気で亡くなり、名も知れない部落に埋葬してきたという話も聞いた。戦争とはかくも悲惨なものかと思う。この親子たちも無事に故国に帰ったかどうか無事を祈るのみ。

昭和二十年九月上旬、私は比島、ルソン島北部より武装を解除され、山を越え、谷を越え、川を渡り、サンフェルナンドより貨車に乗りモンテンルパの収容所に送られた。誰一人として知っている者はいなかった。収容所は四方を

嚴重に囲まれ、四隅に見張り所があり、四六時中実弾をこめた見張りが立っている。約五十名が一つ天幕に入って生活した。

作業は、毎日、死体を埋める穴掘りだった。何十人も死んでいく、百メートルくらい細長く掘っていき、一列五人ずつ毛布に包み、死体を重ねて埋めた。やせ細っているの作業も楽でなかった。誰一人声を出す者もない。ただ黙々と埋めていく。明日は我が身かと皆が思っていたことと思う。道路工事に、毎日自動車に乗せられて働きに行つた。暑いのに、食事はおかゆがほとんどだった。今思うと命がよく助かったと思う。私は十二月二十日頃、夜中に突然呼び出され、収容所に百名くらい行列し、どこへ行くとも告げられず自動車に乗せられ、駅に連れて行かれた。汽車に乗り不安でたまらなかった。二日かかって着いた所がマニラの港だった。それから海軍の海防艦「済州」に乗艦し九州の加治港に上陸、復員した。

船の中では、海軍の作業衣に着替えて一年ぶりで味噌汁と麦飯にありついた。こんなうまい物はなかったと思った。大正生まれの私たちは、支那事変、また、大東亜戦争では軍の中心となって、祖国のため、尊い生命を捧げてきたと思う。日本人として当時の非常時に際して、国を護るという事は当たり前でなんの抵抗もなかったように思う。大

和民族の繁栄と神州不滅を信じて支那大陸に、満州に、北
溟（ほくめい）に、南溟（なんめい）の果てに散って行っ
た戦友を想う時、何と言つてご冥福をお祈りしてよいか言
葉につまる。私達生存者は、何百万という犠牲者の上に現
在の平和がある事を肝に銘じて、平和を大切にしなければ
いけないのではないだろうか。



街頭での千人針風景 太平洋戦争前の頃の風景と見られる(絵葉書提供:河合恭子氏)

「国の礎」少年特攻兵は斯くして生きた

境南町 邊見 憲二

昭和十九年十月、当時旧制中学三年生であった私は、福島県立白河中学校の報国勤労学徒隊として、学友百五十名と共に、ペンを投げ打ち、労働奉仕のため横須賀海軍工廠六浦工場に動員されたのである。

この工場は、特攻兵器を始め各種爆弾や砲弾に、火薬の充填作業を行なう秘密工場のような軍需工場で、管理職は総て海軍技術将校で、仕事は厳正に執行されていた。

この頃から戦局は刻一刻と苛烈さを加え、昼夜を分かたず米空軍の空襲がくり返されていた。B 29 爆撃機による横須賀空襲とグラマン・カーチスといった艦載機による地上すれすれに飛来しての機銃掃射など、身の危険を感ずる状態を重ねて体験したが、一人も死亡者や負傷者を出さなかったのは幸運と言わざるを得なかった。

こんな状態が続いていた年末が近い或る日、引率の教師から、陸軍特別幹部候補生の募集試験があるので希望者は受験してみても、との話があった。そこで私は色々考えた結果受験することとし、横浜市内で第一次学科試験を受けたのである。

その後、相変わらず仕事と機銃掃射の生活が続いていたが、昭和二十年四月、四年生に進級した頃、第一次試験の合格通知が届き、第二次試験の身体検査と口頭試問は出身県の県庁で受験する事になっていた。久し振りに実家に立ち寄り福島県庁で受験し、昭和二十年六月十日に入隊することが確定した。

入隊したときの年齢は十五歳で、入隊した場所は、瀬戸内海にある香川県小豆島で、陸軍船舶特別幹部候補生隊（通称若潮部隊）の第四期生となった。

第一期生から第三期生まではすでに卒業しており、私達の訓練期間も四カ月ということであった。入隊して知り得た話であったが、すでに第一期生千七百名の大部分は、フィリッピン・台湾および沖繩作戦に水上特攻隊として従事し、ほとんどの方々は戦死したとのことであった。

入隊と共に学んだ事は帝国陸軍軍人として自覚と認識を持ち、その責務を全うする為に「陸海軍人に賜りたる勅諭」を早期に完全に習得することであった。

次に船舶兵としての技術を身につけるため、操艇訓練と機関（エンジン）の操作訓練の外、手旗信号・モールス信号・発光信号等を習得した。私達の区隊（小隊）も大発動艇（上陸用舟艇）を使い、池田湾・直属諸島・播

磨灘等を中心として実地訓練に励んでいた。

入隊して二カ月を経過した頃、八月六日広島に原子爆弾、そして八月九日に、長崎に同爆弾が投下された。

そして八月十五日正午、突然部隊命令により天皇陛下の玉音放送を聞くこととなったのであるが、ラジオの雑音にまどわされ放送の主旨を理解することはできなかった。

従って我が部隊の一部では、いよいよ本土決戦の時期が近づいたので、更に更に一致団結し、勇猛果敢な特攻精神をもつて最後の御奉公をすべきだという意見も多く、私達の緊張感も大であったが、その後大日本帝国は米英両国に無条件降伏した旨の伝言があった。

従って私達第四期生は特攻訓練の終了を待たず、復員することとなったが、天皇陛下の玉音放送が、もう少し後であったならば、本土決戦の水上特攻隊として人生を全うしていたかもしれない。

終戦後九月に復員したが、すでに米軍は日本に駐在しており、日本軍人であった者は、見付け次第銃殺されるとの通告があったので、東海道線は使わず、京都から北陸線を使い金沢・新津を経て福島県白河市の実家に帰った事を覚えていいる。お蔭様で帰省復員の折は米軍人には会わなかった。

第一の人生であった陸軍軍人は思いもよらぬ敗戦で失

業した人間と同様だったが、私が昭和二十一年旧制中学を卒業した頃は、食糧事情は悪く、住宅も戦災で焼失してしまった。就職先もほとんど無かった時代だったが、新聞広告に大蔵省が学生を募集するとの記事があったので、大蔵省税務講習所仙台支所（現国税庁税務大学校）を受験、卒業後昭和二十六年東京国税局に転任した。以下昭和六十三年新宿税務署を最後に退職するまで、東京国税局をはじめ管内二十の税務署に勤務、主に法人税の仕事を中心に勉強させて戴いた。その後現在まで二十一年間税理士として社会の為に営業している。

私が武蔵野に住みたいと思ったのは、仙台の税務講習所時代の先生が昭和二十三年暮、武蔵野税務署長として赴任される際、卒業したら東京へ来いよと生徒達に言い残した言葉が脳裡に残っていたのもその一つだと思う。先生の言葉で上京した同期生は十名を超えている。私は今でも武蔵野市に住んでよかったなとつくづく思う。

波乱万丈俘虜(捕虜)生活

吉祥寺北町 児玉 利彦

昭和十九年五月から始まった三十六万人の進撃と言われた湘桂作戦に従軍、漢口の船舶輸送隊、暁部隊の一員として六月に中支湖南省にある、風光明媚で、漢詩杜甫の作った「登岳陽樓」で有名な岳州に駐屯、天幕の宿営に終始した。そこで支那が死守する「衡陽」攻略戦の前線基地湘潭へ弾丸、重油等を必死で船舶やらジャンクと呼ばれる民船を利用して運んだ。前線部隊は、衡陽の飛行場を六月二十六日に占領し、四十二日目の八月八日、やっと衡陽市街を占領した。占領の報は岳州にいる我々の耳にもすぐに達し、ホツと一息ついた数日後、恩賜の煙草を一本ずつ押し戴いたものである。

前線部隊は衡陽戦後、桂林目指して前進を続けた。明け二十二年元旦、岳州駐屯地で市内一巡の競歩で自分の足の異常に気付いた。

軍隊手帳には、軽い傷ということに記載されなかった手榴弾破片擦過傷のためではなく(この頃は軍隊手帳も、無印であった認識票も、千人針の腹巻もすべて失っていた)、栄養失調にアメーバ赤痢、おまけにマラリア三日熱と、岳

州野戦病院分室で診断され、即入室と決まり、住み慣れた天幕と戦友と別れ、後送の段取りになった。

漢口、武昌、錦州、天津、北京と病院を転々、この間、悲惨な野戦病院の体験も得ながら、八月十五日の終戦時は大連と奉天の中間地、熊岳城陸軍病院にいた。錦州の病院は従軍看護婦も多くいて、白米を何カ月振りかで口にする事も出来、四カ月振りに入浴も出来、体力はこの病院で九十%回復していた。

熊岳城では戦友池さんが大都映画会社の台本作者、監督もしていた人で、彼と共同で朗読劇の脚本を書き、演芸会で将兵の喝采を浴び、それが基で池さんと二人、報道班を命ぜられ、色々恩恵を受けた。終戦の日、重大報道があると部隊長以下、全将校が一堂に集まり、池さんと二人、聞き取り役としてラジオの横にいた。雑音がひどく充分には聞き取れなかったが、戦争を終わらせるという天皇の言葉という事だけはハッキリ分かった。

その夜から、あれ程厳しい軍律の部隊は点呼もなく、「何を使ってもよいから大きな袋を作れ。」ということ、で、窓の暗幕やら不要で積んである藁布団の布等で慣れない針仕事で袋を作った。日本人の諦めの良さを如実に見た思いである。そうしてさらにびっくりしたのは、終戦翌日に順天堂医科大出身のM大尉が早くも脱走して

行方不明となった事である。

熊岳城は温泉地と同時に満州では有名な林檎の産地で、部隊の周囲に何カ所か日本人経営の林檎畑があった。働いていた人たちは、終戦と同時に全員どこかへ消えてしまい、畑は無人で、部隊全員で手製の袋やら雑嚢を持って押し寄せ、一個でも多く取れということ、脚立やら樹に登り、手当たり次第かじったり、袋に詰め込んだものである。

それからの行先が全く不明。一週間くらい後、有蓋貨車に詰め込まれ、奉天駅へ送られた。将校、下士官の細君は皆、坊主頭で軍服姿に変装。不思議と子供の姿はなかったが、一団となって他の貨車にいたのかも知れない。奉天の駅から徒歩で、郊外の日本人小学校の仮俘虜収容所に入れた。ソ連の太った女兵士が校庭で羊の丸焼きを作っている姿は、今でも目に焼きついていて。鉄条網を張り巡らした収容所の裏手は中国人住宅街で、鉦や太鼓を打ち鳴らし、泣き男、泣き女を先頭にした葬式を見たものである。奉天では、戦友のKと、父が歯医者をしていた現地招集のHという戦友とが便所の窓から脱出に成功した。

復員後に申請してもらった軍歴確認書に（九月十四日奉天においてソ連により武装解除）と記してある。仮収容所から、奉天郊外北陵にあった「ソ連第三方面軍俘虜収容所」という墨書きの大きな看板のかかった本収容所に、剣付銃

のソ連兵に挟まれて入所した。その場所はかつての関東軍の通信部隊の跡であった。

暗唱で苦勞した軍人勅諭も「生きて虜囚：：」の戦陣訓など全く浮かんでこず、淡々と公園にでも入るような平静であった自分が今でも不思議である。床の高い兵舎で新京の警察官だという数人が潜んでいて、夜中にトウモロコシや水をこっそりと与えた事もあった。三十名位が一室で食糧はほとんど馬糧のトウモロコシをスコップで炒って食べる。たまに粉でドーナツ風のものを作った事もあった。馬肉の塊がバケツに入って出された事があったが、食べられなかった。

ソ連軍は市民もだまして連行拉致し、千名に達すると貨車でシベリアに送るのであった。千名を選ぶ前に必ず日本軍医の形式的な検診があった。ソ連邦が当時肺結核を大変恐れているのを小耳に挟み、軍医の「既往症は？」との問いに、とっさに「肺浸潤」（結核）と答えたところ「よし、肺潤。」と言われ、ひょうたんから駒ではないが、本当に肺結核なのかと一瞬びっくりしたが、お陰でシベリア行きを免れた。神の加護としか思えない瞬間である。それから間もなく、この収容所はノルマを達成して解散となり、シベリア行きを逃れた者は全員解放された。

門を出るや、一目散に奉天市内に飛んで帰り、偶然その日のうちに、さきの仮収容所を脱走したKとばったり会った。Kの紹介により、満語べらべらの親切的な福島県の棚倉出身のM宅にその日から宿泊することができた。その日から数々の行商や露店を体験した。石罅の小売をしている時、女優の小暮実千代さんが客に来たので「小暮美千代さん、ファンです。」と話しかけた。すると「あら、有難う。兵隊さんね。気をつけてね。」と木綿の満服姿の私を日本兵と見破った炯眼に恐れ入った。そして奉天市最後の引揚民として十月一日胡蘆島港から大郁丸という引揚船で、佐世保諫早港に着き、復員手続をした次第。波乱万丈書き切れぬ経験である。



昭和 17 年

教育召集当時の児玉利彦氏

終戦直後の水先案内人の体験

境南町 志賀 信和

終戦となり九月に入ると大湊には秋風が吹き始め、山肌には秋の草花が可憐な花をつける。現在霊場といわれている恐山や釜臥山にかかる雲の移動が早くなると、主計長の下宿の老人が山を見上げて「やませだなあ」と語尾を上げて言ったものだ。その意味は、そろそろ雪雲が来るぞ、山おろしの風だぞとでもいう事だそうで、みちのくの淋しい季節感を思わせる方言であった。

この頃、私に大湊接收のため入港して来る敵機動部隊へ派遣される役目が回って来た。応召兵はその頃ほとんど復員し、部隊は必要な人員を残すのみとなりつつあり、兵舎はガランとした淋しさの中に帰心をそそられる毎日、突然の命令で警備府戦務参謀の所へ出頭、注意を受けた。「まづ生還は難しいと考えるべし、されば家族への伝言等あれば何でも今夜のうちに書き残す事、貴重品は全て預かるにつき携行しない事、一切の帯剣は許されない。メインマストに高く米軍艦旗が掲げられているので、乗艦時は甲板上で不動の姿勢と挙手敬礼する事を忘れるな、海軍士官としての常識であるぞ、出港は今夜午後八時。今のうち法務課

へでも行つて国際法の勉強をしておけ、もし好きな者がいれば、取って置きのスコッチウイスキーがあるので、それを振舞つてやる。」と言われた。

有無を言わせない命令の下達と共に防備隊棧橋より海防艦「倉橋」に乗艦、出港した。各部隊は上空へ向けて放水の礼をなした。いよいよ最期となるかもしれない時が来た。防寒について何も準備していないが、アメリカさん何とかしてくれるだろうかとふと危惧の念にかられ、灯火管制の解けた司令部についた明りが黒い海面に何時までもきらきらと輝いていたのが極めて印象深い。

翌朝、午前三時頃「敵艦見ゆ」の伝声管の声で起床、急いで艦橋で見るとほのかながら白く見える巡洋艦の姿が遠くに見えていた。時間もまだ早い頃であり、しばらくそのままの航行状態であった。約一時間後、敵艦はマスト・煙突からかすかな夜明け（朝日があたってピンク色となる）を迎えたようで、なかなか美しい船に見える。多分、砲をこちらに向けた状態で少し距離をつめて来たかもしれない。数隻の内火艇がこちらへ向けて発進し大変な速度をもって接近、海防艦の裏側につけて来た。先方は接舷を強行、タラップに立った海軍士官が「Get out.」と言ったようにとれ、移乗を促して来た。兵員に

到るまで当方でいう一種軍装の黒い軍服に自動小銃をつけている。軍帽の庇には金モールのついた礼装のような出で立ちが実にきれいで立派に見えて、我が方の三種軍装が何か貧弱に見えたが、無言で乗艇、例の白い船に向ってモーターボートのような速さで我々を連れ去った。海防艦がどんどん小さく離れていって、やがて近接艦に移乗、数多くの艦艇の待っていると思われる姿が見えるところまで到達した時は、すでにすっかり夜が明けていた。思っていたより立派な一群であり、我々三名宛一組となり、分かれて移乗が始まった。中に作業船のようなものもあり、武装商船もあり、空母や主力艦艇もあって、堂々たる艦隊編成に見えた。

移乗に際し、高い舷側に縄梯子がかけられ、筆者が先頭に立って、縄に足をかけた。半長靴を履いた筆者は、登りにくい感じであったが、絶対に落ちるような事があってはならぬと心に決め、必死の思いで一步一步あがっていく。下に目をやると、航行中であるため、山のように高い波が相当のスピードで後ろへ後ろへと移動していくのが見え、それこそ生きた心地もしなかった。露天甲板には多数の将兵たちがその様子を見ている。中に手を伸ばし引き揚げようとする者もあり、甲板に登り立った際、取り囲む乗員たちは輪のように広く筆者のために場所を空けてくれた。乗

員たちはほとんど半袖クリーム色の艦内服で、筆者の着ている軍装が見劣りする感じもしたけれど、軍艦旗に対する挙手敬礼は忠実に守った。皆いつせいに何か声を出したように聞き取れ、そのときばかりは若い筆者としてはなぜ一種軍装白手袋としなかったと考え、今で言う格好良い姿でありたかったのは大勢の人だからと、あるいは初めて見た日本軍人に対する強烈な視線を意識したためであったろう。

「私、本艦の副官をしているあなたと同じ中尉です」と日本語で話しかけてきた青い目の白人士官の人がいた。筆者は九月上旬に俗称「ポツダム中尉」と言われる、戦後の進級をもらったばかりで、階級章に桜を一個増やしたほやほやで、かなり恥ずかしい感じではあったが、その場は前からであったように知らん顔で体面を繕った。彼は、通訳の仕事をして貴方のお世話をしますから、何も心配しないで思った通り話してください、とか、丁寧に名前を教えてくださいました。当方から好意に感謝すると述べたところ、皆に筆者が警備隊に所属していると紹介をしてくれたりした。

「本艦は旗艦でフレッチャー中将が乗っています」との説明があり、さらに「出来たら今、貴方の写真を撮らせてくださいませんか」と大変丁寧な物腰で、

とうてい捕虜を扱うような態度とは違う。とつさに三種軍装を意識してしまって、「No thanks.」と答えたと思う。近くにいてカメラを構えていた人達は、いつせいにカメラを下ろしてくれた。艦橋で立ったまま、遅い朝食のサービスを受けた。食事はその豪華さにまず驚き、コックが乗艦している事など、日本海軍ではあり得ないと思えるのであった。見張員の勤務中の態度の悪い事。海面に浮遊する異物の発見の早い事。それは日本海軍のように見張員の肉眼、眼鏡による訓練で達成する特技では全くなく、マスト上で全周回転しているレーダーによるものらしい事。またそれに対し、おびただしい数の機銃掃射を浴びせるその対応の早い事。何かわからないが、突如として吹奏楽の音が短い間鳴ったり、兵員は上官とただの友達みたいに接していたり、海軍で廁という TOILET の各入口ドアのない事。館内で誰かが犬を飼っていたりする事等々。我が方と極端に違う事にびっくりするばかりであった。

その頃、日本近海、殊に海峡附近には機雷敷設があつて艦隊の陸岸近接は危険であつたため、我が方で持参した海図上の「Best true course」の説明がなされた。先方の航海長及び高級将校達が熱心に自分たちの海図を見比べ、ミーティングが行なわれたが、当方かなり精度の高い図面を用意していたので信用を得たようで、なんら問題も生じ

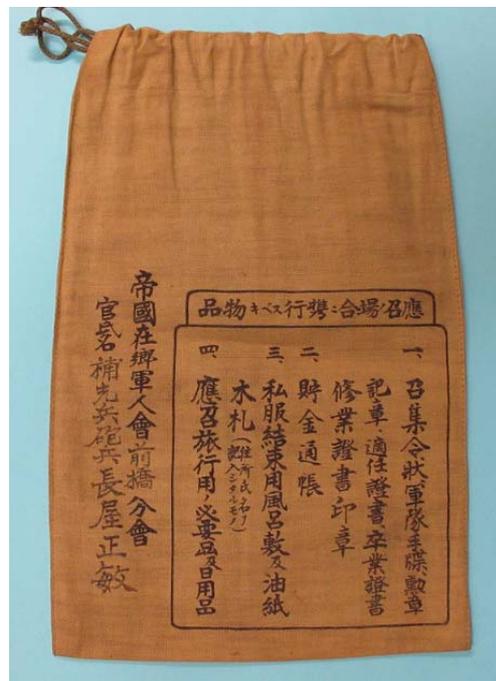
た様子もなく「Thank you.」という事で、笑顔さえ見せていた。

会見の場では日米海戦について聞かれ、多言不要の見地より航空機の数で負けた事が残念であると答え、先方も何人かもつともである、同感であるとの意思表明があつた程度で、それ以上の言及を相互とも控える空気が流れ、大湊の帰国風土、一般民の生活状況、食糧事情といった話題に転じ、軍事上の事については聞きたかつた様子ではあつたが、何故かこれを避ける風に感じ取られるのであつた。対米感情について先方は不安があるらしく、米海軍軍人の上陸を一般でどう考えるか心配そうに聞いてきた。日本海軍で保有する航空機については、彼らはほとんど知っていると云って、自慢らしく写真を見せたりした。軍事上の事は知り尽くしているという優越感のようなものを持つていたかも知れない。

大湊へ入つて来たのは既に夕刻となつていた。副官は、手土産として煙草のようなものが沢山入つた一抱えもある箱を渡してくれ、私達のそばを離れない。乗員達の待つ舟艇に移乗し、幾度も握手をして別れを惜しんだ。上甲板からレールを伝つて、海上に舟艇ごと押し出され海面に叩きつけられた。エンジンは全開となり、速いスピードをもって舷側を離れた。艇長は防備隊棧橋まで送

つてくれた。実にスマートな将校で、身軽に岸壁へ飛び移り、筆者の手をとって引っ張ってくれた。笑顔を忘れず、また握手をした後、すぐまた舟艇に乗り移り帰って行った。とにかく、無事に、しかも考えられない短期間に帰れた嬉しさをもって警備府に戻り報告を済ませた。夜の灯火がその嬉しさを倍加させてくれた。持ち帰った煙草の類は周囲の人たちに取りられてしまっただけで、警備隊に持ち帰ったのはわずかに二個にしか過ぎなかった。皆一様に嘘のように早く帰ってきた事と、出発前は鬼畜米英としてひどい取り扱いを受ける覚悟で行ったものの、それが逆に大変丁寧な軍使としての扱いを受けた事の意外な事に驚かされ、虚脱感のようなものに見舞われて、話して聞かせる方も夢を見ている気持であった。

※筆者は故人で、遺族の方より原稿の提供をいただきました。



奉公袋(左:表面、右:裏面 提供:長屋恒久氏)

出征兵士が軍隊に出向く際、軍隊手帳、召集令状など、軍隊生活に必要なものを収納しておくための袋

生と死を分けた東京大空襲

吉祥寺北町 牧谷 有

私は、本所区堅川（たてかわ・現在の墨田区立川）で兄一人、妹五人の長女として生まれました。兄妹が多かったのでとても賑やかでしたが、幸せな毎日でした。父は四十歳、母は四十二歳、戦争が激しくなってきた昭和十九年の頃、兄は軍需工場へ行き、私は女学校二年で、学徒報国隊としてテントを作る工場へ働きに行きました。学校の勉強は一週間に二日でした。すぐ下の妹二人は、小学校五年生と三年生で、千葉の方のお寺に集団疎開として行っていました。翌二十年になると、空襲の為、夜も安心して寝られない日が多くなりました。昼の下に防空壕を掘って、その中で寝たこともありました。

一回目に空襲で家が焼けたのは、二月二十五日の大雪の日でした。幸い荷物もだいぶ出せて怪我もしなかったのですが、近くの空き家を探して借りる事にしました。

そして三月十日未明、突然の空襲警報に起こされました。窓を見ると外は真っ赤に燃えていました。そして母は三歳の妹を、私は一歳の妹をおんぶして、靴をはく暇もなく、下駄をはき、外へ出ました。父は布団を自転車に縛りつけ、

母は片手に風呂敷包みを持ち、六歳の妹の手をひき、私は両手に風呂敷包みを持ち、父がそれぞれの防空頭巾に水をかけ、夢中で走りました。

頭上をB 29が次々と飛んできて、焼夷弾をばらまき、ほうぼうで大火災が発生し、風にあおられ火の粉が飛ぶ中をくぐり抜け、途中で風呂敷包みを一つ捨て二つ捨て、一回目に焼けた跡を指して走りました。そして焼け跡に着くと、父は自転車から布団をおろし、近くの防火用水の水を布団にかけ、みんなが入りました。布団をあけて外をのぞいてみると、五、六メートル先に、おばあさんが焼け跡に落ちているトタン板をずると引きずって集めておりました。

そして私のおんぶしている一歳の妹があまり泣くので、母に「お乳を飲ませるからおろしなさい。」と言われ、背中からおろしました。母は三歳の妹をおぶったままでお乳を飲ませていました。

みんな荷物を持って逃げて来ていました。この日は強風のため、吹雪の様な火の粉で荷物などに火がつき、すごい勢いで飛んで来ました。父は、ここは危ないから、どこか避難できる所を探してくると言って、六歳の妹を連れて行きました。そのうちに、かぶっていた布団にも火がつき、私は息が出来なくなり、夢中で布団から出ました。外に出

るとボタン雪の吹雪のような火の粉が飛んで来ました。立っている、着ているコートにあちこちと火がつき、手でぼんぼんと叩きながら、一足二足と歩きました。そして防空頭巾にも火がつき、顔中火傷でヒリヒリ、髪の毛もチリチリと燃え、私は防空頭巾を捨てました。救急カバンにも火がつき、それも捨てました。そして今度は地面を這うことにしました。五、六メートル這っていくと、そこには何と、さつきトタン板を集めていたおばあさんがいて、父と妹が入らせてもらっていました。父は母を迎えに何度も外に出てみましたが、両目に火の粉が入り、母のいる所は風上なので、行く事が出来ませんでした。偶然私もそこにたどり着いて、入れていただきました。母は「助けて、助けて」と叫び続けました。いつしか声も聞こえなくなりました。

トタンの中も、すごい煙と火の粉が入ってきて息も出来ません。するとおばあさんが、「地面の土を爪でガリガリしては『ハーハー』としなさい、鼻で息をしてはいけません、口で『ハーハー』と吐くだけ続けなさい。」と言われました。

私達はそれをずっと続けました。いつしか気を失ってしまいました。どの位時間がたったのかわかりません。夢を見ているような気持ちで私は「あの世」へ行く道を歩いていま

した。そして門の所には、ひげのはえた、こわい顔をした男の人が立っていました。私がそこに行くと「あなたはまだ早いから帰りなさい」と言われ、無理に帰されました。ふと気が付くと外が明るく、煙が一面に漂っていました。トタンの外に出てみると風もやみ、一夜の出来事はうその様でした。そこいら中に死体が転がっていて、真っ黒に焼けている人、顔も体も火傷でふくれあがり、生臭い匂いがしていました。母のいた方を見ると、母は座ったまま体が燃えていました。前に一人、後ろに一人、妹が転がっていました。私はブルブル震え、ただ呆然とするばかりで涙も出ませんでした。父は六歳の妹には見せない様にしていました。

それから私達は近くの中和(ちゅうわ)小学校に行く事にしました。至る所に死体があり、またぎながらやっと学校に着きました。まるで地獄の様、重体の人が廊下で何人も寝かされていて、次々と亡くなり運び出されています。私達は教室に入らせてもらい、顔中火傷でヒリヒリしてとても痛くて我慢が出来ないので治療をしていただき、目と鼻と口だけ出して薬をつけ、ガーゼを貼っていたきました。そして、炊き出しのおにぎりをいただきました。私はもうこわくて、こわくて、一刻も早く田舎に行きたくて仕方ありませんでした。

偶然学校の中で、近くに住んでいた母の弟に出会いまし
た。今夜は学校に泊まろうということになり、翌朝一緒に
母のいる所に行きました。途中で救急カバンを捨てた所で、
カバンは燃えて、中に入れてあった蛇の皮の財布だけが焼
け残っていました。それを拾い、母の所に行きました。

そこには母が座ったままの姿で亡くなっていました。叔
父さんはびっくりしていました。そして父に「死体を田舎
に運ぶ事が出来ないの、何か形見を持って行った方がい
い。」と言って焼け跡から花ばさみを見つけてきました。父
に渡し「指を一本ずつ切って持つて行くといい。」と言いま
した。でも父にはとてもそんな事は出来ませんでした。代
わりに叔父さんが切ってくれることになり、その日は学校
に帰りました。

翌朝、母のところに行きました。父は六歳の妹に見せな
い様に少し離れた所にいました。私と叔父さんと母のそば
に行き、三人の指と髪の毛、着物の焼け残りを叔父さんが
切ってくれました。

どんなにか辛い思いだったと思います。それを持って叔
父さんと別れ、父と三人で父の実家のある青梅に帰る事
になり、両国駅に向いました。生臭い匂いのする死体をまた
ぎながら、一足ずつ行きました。西堅川橋に行くと、川の
中には一面に死体が浮かび、橋の上にも折り重なって亡く

なっていたり、岩のかたまりの様に真っ黒になって死体と
は思えません。私達は口をおさえながら死体と死体の間を
ぬうようにやつと両国駅につきました。

たった一晩でこんな姿に変わってしまった下町。この日、
三月十日は私の十四歳の誕生日でした。この日が母と妹の
命日になるとは本当に悲しい事です。

今ある私の命は関東大震災の経験をしたおばあさん
のおかげです。助けて頂かなければ命は無かったと思います。
青梅に行つてからは食べるものに困る毎日で、父は子供
に食べさせ育てる為に、身を粉にして一生懸命働きました。
どんなにか辛い毎日だったと思います。お墓参りは私達と
一緒に行ったことはありません。いつも一人で行つていま
した。六十一歳で亡くなるまで、一度も戦争の話をした事
はありませんでした。

三月十日のこの日、B 29が飛んで来て焼夷弾をバラま
き、無差別爆撃をし、たったの二時間の空襲で町は朝まで
燃え続け、十万人もの尊い命を奪ってしまいました。

二度とこの様な悲しい事が起きないことを願います。
そして多くの若い方々や学生さん達に読んでいただき、
今ある命に感謝して、どんな事があっても耐えていける強
い心と思いやりの心を持って、生きていただきたいと思
います。毎日学校に通つて勉強が出来るということとは、とて



も幸せな事なのです。今を大切にして下さい。

学徒報国隊の腕章と空襲から焼け残った蛇皮の財布と中身の紙幣
(提供: 牧谷有氏)

幻のランドセル

西久保 田中 瑞枝

「リュックを背負って、学校へ来んさった、遠足みたいだがヨ・・・」というささやきとクスクス笑いが背後で聞こえる。転校生の背中のリュックは、縞もようの入ったえんじ色のもので、それがよけい目ざわりなのだろう。

昭和二十一年九月、鳥取市K小学校の一年生のある教室風景。そう、その日は遠足でもないのにリュックサックを背負っていた。当たり前のように教科書やノートを入れて。その次の日も、また次の日も。

私たち一家は終戦の翌年、外地である満州から引き揚げ、ひとまず鳥取市の親戚の家に落ち着いた。私はリュックのことなどまったく気にしていなかった。リュックは母がしつかりした帯を裁断して作ってくれたもので、私と共に大陸からはるばる海を渡ってきた同志のような存在だった。上部でひもを絞って結ぶのではなく、箱型で上からかぶせるふたがあったらなー、とたまに思うことはあったが、「ピカピカの革のランドセルを背負ったことがあるもん、でも・・・」と誰にも話せないかすかな記憶が、子どもの自負心を支えていたように思う。

昭和二十年八月、私は五歳。奉天（現在の瀋陽）郊外の代用官舎（公務員住宅）に家族六人で住んでいたが、父は五月に召集されていなかった。

ソ連軍が満州に侵攻したのは八月九日。奉天の市街地では時折空襲があったようで、役所の上部から疎開の話が出たらしい。十家族、五十人くらいの人たちと、列車で三時間ほど南下したところにある、営口（エイコウ）という港湾都市に疎開することになった。（小さな子どもには疎開の意味も、戦争の意味もわかっていなかったし、まして敵対する国のことなどは知らなかった。子どもたちは、遠出が楽しくてはしゃいでいたように思う。）引率者の男性をのぞくと、ほとんどの家族が女性と子どもだった、と母から聞いている。ある料亭の大広間に雑魚寝して、主婦たちは輪番で食事の用意をする日々だった。

私には四年生の兄と二歳と一歳になる妹たちがいた。母は、栄養不足からかまだ歩けない下の妹を背負いながら、掃除や炊事当番をこなしていたようだ。

蝉が鳴きだしていた八月十五日のことを、私は覚えている。外遊びから帰ってくると、大人たちがどやどやとどこからか戻ってきた。でも、ラジオで敗戦を知らされたらしい大人たちの表情などはまったく記憶にない。た

だ、思い出すのは母が話していた隣の奥さんのことだ。『日本が勝ったときにこの日の丸を振るんだから』と言って、出発前に大きな旗をみんなに見せていたわ』。

終戦の翌十六日には営口はソ連の軍港になるので、日本人は残らず退去せよ、という命令が出た。それは列車の都合で延期となった。翌十七日午前九時には「三時間以内に退去せよ」という命令が出されたが、母は出発の準備に手間取ってしまった。ようやく外へ出たときには、街は静まり返っていて、どこかで威嚇射撃の音が聞こえていた。

母の背には赤ん坊、手には大きなトランク。兄は二歳の妹を背負って小さな手荷物を持つ。私は茶色の革製のランドセルを背負っていたが、それは父が出征する前に、つてを求めて注文してくれたものだった。私たちは、土手のところにとまって列車をめざし急いでいた。と、銃を手にした一人の若いソ連兵に行く手をさえぎられてしまった。彼は荷物をよこせという仕草をした。母は「だめ」と手を振ったらしい。いきなり銃を突きつけられた母は危険を感じ、革のトランクを手放した。それから彼は私の腕からランドセルを奪いとって逃げ去ったと聞くが、その瞬間を私はまったく覚えていないのはなぜだろうか？ただ、思い浮かべるのは、いつもおなじ静止画像のような光景である。そこには「銃口をこちらに向けたソ連兵、そし

て彼と向かい合っている家族」がいる。

トランクの中身の大半は、おむつだったそうだが、彼らのお目当ては革製のトランクであった。

父は軍隊で苛酷な訓練の日々を重ねたが、敗戦を知ったのは行軍で山を下りてきた八月二十日だったという。延吉というところで、部隊ごとソ連の捕虜になって、収容所に入れられた。そして翌日はシベリアへ送られるという前夜、父は仲間と二人で脱出をはかった。ところが銃声を背後に聞いて身を伏せるうちに相棒とはぐれてしまったので、互いの無事を祈りながら、やむなくひとり畑に身をひそめて飢えをしのいだり、知人の世話になったりして、命からがら一週間余りかかって奉天の自宅にたどり着いたのだった。

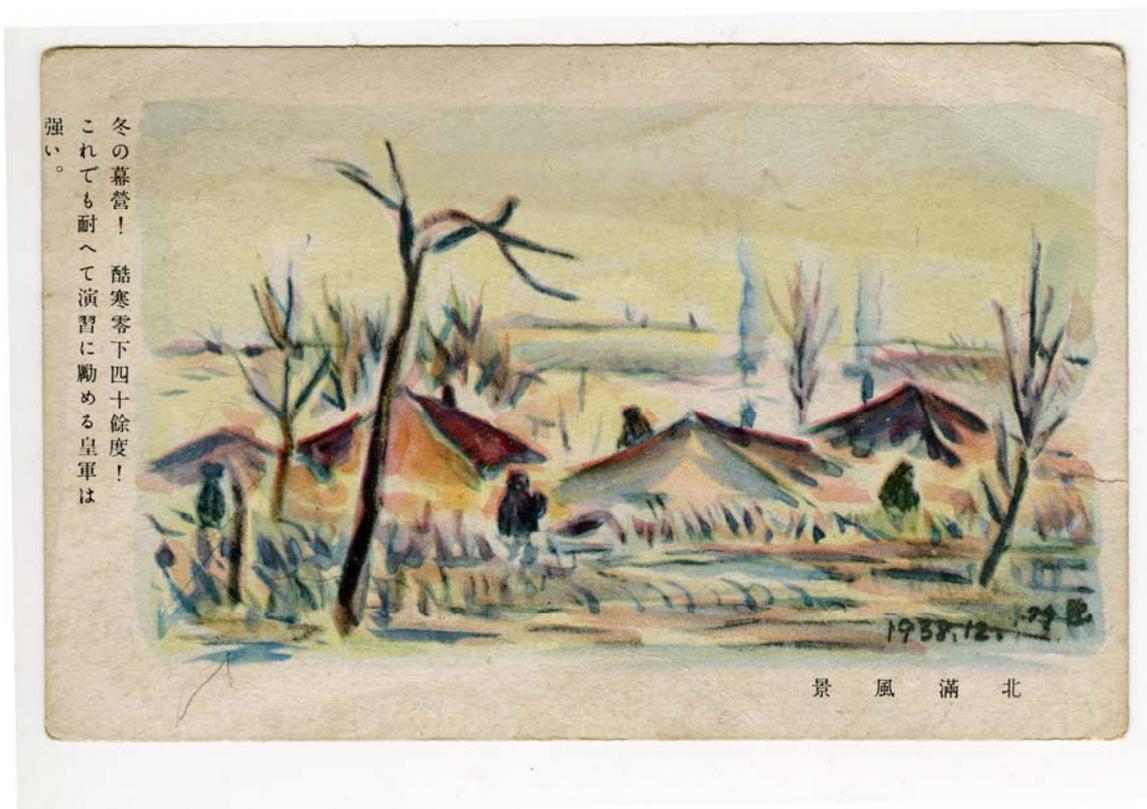
その頃、ソ連軍は居住者の名簿を提出させていたがそれは、徴用のため働けそうな男性を求めているからだという噂があった。事実、近所の男たちは一斉にどこかへ連れていかれてしまった。それは父の帰る数日前のことだった。

その後、翌年の引き揚げの時まで父は半ば潜伏生活を続けることになる。娘のランドセルには先祖の位牌と学用品が入っていた、と聞いて、父は母に言ったそうだ。

「祖霊が身代わりになって、家族を守ってくれたのだ

ろう」と。

翌二十一年、四月、私は兵舎の一部を教室にした小学校に入学。母のお手製のリュックを当然のように背負って通学したが、ある日、学校へいくと黒板がなくなっていた。次の日にはオルガンが、また次の日にはすべての机と椅子が姿を消してしまい、ついにはがらんどうの教室になってしまった。ソ連兵たちが運び去ったのだった。私たち一家が日本へ引き揚げる数ヶ月まえのことである。



昭和 13 年当時の北満州での演習の様子を伝える絵葉書(提供:河合恭子氏)

祖母の原爆体験を聞く

成蹊大学 文学部 武藤 裕美

八月十五日、私は父方の祖母（武藤三智）が住む長崎県佐世保市を訪れた。祖母は一九四五年八月九日に投下された原爆の被害者である。

私は長い間、祖母に原爆について話を聞くことを躊躇していた。私が小学生の頃に一度だけ原爆について尋ねたことがあった。その時の祖母の辛そうな顔が忘れられなかつたからだ。私は慎重に言葉を選んで話を聞いていこうとかなり緊張していた。しかしそれ以上に恐ろしい記憶を思い出さなければならぬ祖母はもつと緊張していたのかもしれない。祖母は堰を切ったかのように当時のことを突然語りだした。

祖母は当時女学校四年生だった。祖母は長女で下にみんな二歳ずつ歳が離れて、妹が二人と弟が二人と、七人の家族構成であった。祖母の父は出兵しており、祖母の父を除いた残りの家族は長崎に住んでいた。そして祖母は学徒動員により佐世保市の海軍工廠で働いていた（工廠とは兵器を作るところのことだと教えてくれた）。もともと祖母の家族は佐世保に住んでいたのだ。焼けたんですよ、家がね。六月二十九日の空襲で佐世保市が。住むところが

なくなってしまったのだけれど、長崎の長崎大学病院の近くに私の父の姉の家があったの。そこは大きな庄屋さんをしていて、貸家が何軒もあまっているからおいでと言われたの。母は学徒動員がまだ一年ある私を残して長崎に身を寄せることにしたのよ。」と祖母は家族が離れて暮らしていた理由を教えてくれた。

一人離れて暮らすことは辛く、長崎での家族の暮らしぶりを羨ましく思ったそう。一度だけ様子を見に行つたことがあったという。それは原爆が落ちる三日前だった。今思えばお別れに行つたようなものだったと祖母は言った。「みんながね、佐世保は軍港の町だからお姉ちゃんはずっと危ない目に遭うよ、大事にしてねって言ってたわ。そして私はまさか長崎に爆弾が落ちるなんて思っていなかったから、みんなはいいねって言ったよ。大病院の直ぐ近くで大きなお家に楽しそうに生活していたから。そして私は頑張るね、また会おうねと言って別れたの。」祖母はそれから少しだけじつと下を向いていた。

話はいよいよ八月九日の日のことになった。祖母は長崎に広島と同じような爆弾が落ちたらしいという知らせを学徒出陣先の海軍工廠の宿舎で受けたそう。それは投下された日の夜だった。「その原子爆弾なんてものがみんなどんなものか知らなかったけれど、とにかく長

崎で空襲があったってよ、という連絡をもらったのよ。どうやら広島と同じような爆弾が長崎に落ちたらしいぞという知らせを受けたんですよ。」それから祖母は長崎に向かった。勤務先が海軍であったことが幸いして、祖母の上司が当時入手困難な列車の切符を手に入れてくれたおかげだった。

「列車は道ノ尾までしかいかなかった。それ以上は入れないと言われてね。そこから浦上川に沿って歩いていきなさい。浦上川沿いに歩いていくと川の中にいっぱい死体が転がっててさ。みんな『水・・・水をください』って。もう、もうねそれこそ地獄よ。顔は焼け爛れて・・・今思うと私はあの時どんな風に歩いたかなんて覚えていないわ。」私はその時の恐ろしいと思われる様子を資料館で見た光景を思い出した。垣間見る程度でも怖いと思ったその光景は実際どれ程のものだったのか。私は恐ろしかったが尋ねた。「怖いなんて通り越してね、地獄はきつとこんなじゃないだろうかと思った。わんわん泣きながら歩いた。」祖母の家族は長崎の元原町というところに住んでいた。祖母が浦上川沿いを伝ってそこへ着いたのは、翌日の夕方だったそうだ。私は町の様子を祖母に聞いた。祖母は思い出すように目をつぶった。「もう死体がいっぱい。本当にビックリしたの。なんにもない焼け野原で。殺伐たるものよ。人間は焼け爛れてね。幽霊みたいな人がウロウロして

た。町はまだ燻って、煙が出た。当時は今みたいにニュースなんてものはなかったからね。浦上川を歩いていく途中で警防団の人たちから長崎はだめだって言われたよ。私は爆弾という認識しかなかった。広島と同じような恐ろしい威力のものであるということだけしかわかっていなかった。でも私はとにかく行かなきゃと必死だったわ。みんな親切で、長与でも道ノ尾でも・・・もう少し落ち着いてから行ったほうがいいとも言われた。でもたくさん死んでいると聞いて、もしもそうなら早く行って遺骨だけでも拾ってあげなきゃ、とそればかり考えてね・・・」

祖母はそれから繰り返し長崎の様子を地獄だと言っていた。「今テレビで流しているようなもんじゃないわ。草木一つ生えてなくて。空も暗くどんよりしていた。」家族のもとに着くまでに祖母は泣くのを通り越していたそうだ。始めは恐怖で足も動かなかったのに探さなきゃという気持ちが祖母に力を与えていたと言う。

尋ね尋ねてやつと元原町に着き、家族について知ることができたようだ。「妹二人は即死で、弟二人は防空壕に入っていて一人は無傷でもう一人は怪我をしているそうだと教えてもらったわ。母は怪我をしているが大丈夫だと聞かされた。」諫早にある国立病院に搬送されているとも聞き、無傷であった下の弟を知り合いの方に預

け、急いで向かったそうさ。

諫早までは少し距離があったが、幸い警防団の知り合いの方の車に乗せてもらったという。祖母は病院での話になると一層辛そうだった。次から次へ矢継ぎ早に話していたのがうそのように慎重に言葉を探して話してくれた。「重症の母がいた。足はこれぐらいしかついてなかった。(そういつて大腿あたりを触った。)弟は顔が焼け爛れていて・・・私はもうわんわん泣いたよ。泣きながらどうしていいかわからなくてさ。でも母を見たときすぐに『ああもう母はだめだなあ』と思った。弟は顔と右腕の火傷だけだったから助かるかなと思ったりもしたけれど、母はもう・・・その晩看病した。そして翌朝ね、母が言うにはね、佐世保の家が焼けてしまったときに長崎の親戚からだけでなく島原の知り合いからも誘いがあったのよ。島原のほうが安全だったけれど島原は祖母の母方の実家で、長崎は祖母の父方のお誘いだったの。長崎のほうが色々住み易いと思つて決めたんだけど・・・そのときもう運命は決まったという感じよ。母は泣きながら『ゴメンね、ゴメンね』といつて。『島原に行つていれば助かったのにね。みんなを殺しちゃったね。』つて。母は死ぬまで泣いてたわ。」祖母の母が亡くなると後を追うように上の弟も亡くなったそうさ。死んだ者の焼き場は溢れかえつていて入れなかった。そして祖母は二人を病院の広い庭に周りの人に手伝っ

てもらいながら穴を掘り、埋めて焼いたそうさ。祖母はついに泣き出した。話をするために懸命に涙を流すことを我慢していた。しかし祖母はそれからの生活を話してくれた。

その後、祖母は親戚の兄弟と下の弟と四人で長崎の瓦礫の中で生活したという。無傷であった下の弟はいわゆる原爆症にかかり、瓦礫生活を始めて十日目に身体に斑点が浮かんでしまった。当初は無傷と思われていた下の弟は、家族中の誰よりも苦しみ、丁度一カ月目に亡くなったそうさ。四カ月あまり経つて朝鮮の戦場から帰国した祖母の父が祖母を迎えにやつてきて、二人で佐世保にて生活をしたという。

インタビュを終えた後、祖母は私に「勉強でこんなテーマを扱って勉強するのは感心だわ。」と言つた。私は祖母に誉められ照れくさかつたが、同時に感心されてははだめだと思つた。戦争や原爆に関心を持つことは当たり前であるべきだからである。「あれはもう地獄よ。」そう何度も繰り返し返した祖母。それからの生活は幸せだったと言つていたが、祖母の母親が亡くなったときに流した涙を私はずっと忘れられない。

※この文章は成蹊大学文学部墓田ゼミによる戦争体験インタビュ集より転載しました。

祖母からの戦争体験を聞いて

成蹊大学 文学部 五艘 佳奈

八月十四日金曜日、祖母の五艘侘子（七十六歳）に富山大空襲に遭った時の話を聞いた。

祖母は昭和八年に現在の富山県富山市稻荷本町に四人兄弟の長女として生まれた。戦時中は、会社に勤める父と女学校に通う祖母は富山に、母と兄弟三人は横江（同県立山）へ疎開していたそう。当時、大東亜戦争と呼んでいた第二次世界大戦が始まったのは祖母が小学校三年生の時だった。「服は町内会で配布されている切符で交換、米は家族構成の載っている通帳をもらい、人数分だけ買えることになっていた。どれだけお金を出しても、ものがないから買えなかった。」と当時を思い出し、語ってくれた。

当時はサツマイモ、かぼちゃ、おかゆ、ジャガイモ、きび団子などが主な食事だったという。砂糖やたばこ、お酒や紙など、今では日常簡単に手に入る物もなかった。また「銃後の一般国民には食糧少」と言われていたため食糧が少なかった他、鉄や金属は戦闘物資として供出しなければならず鍋もなくなってしまうという。銃後とは、直接戦争に関わらない一般国民のことである。女学校での生活も過酷なものだったと語る。「学校の本を疎開先に運ぶために、今では電車に乗って三十分で行ける所を、一日かけて

歩いた。また校庭に穴を掘ったり、体育の時間には竹やりで突く練習もした。二年生以上は教室にミシンを入れて朝から晩まで軍服を縫っていた。」と語る。

その祖母が富山大空襲に遭ったのは彼女が中学生一年生の一九四五年八月一日の夜のことだった。「夜、寝付いたと思ったら石川の方からB 29がやってくるというラジオを聴き、父を起こした。」と当時のことを一つひとつ思い出しながら語ってくれた。「父は近眼だったため戦争に行かずに済んだ。」と当時父親と一緒にいたことに幸せを感じていたという。しかし、男の人は空襲が来たら逃げずに「火たたき棒」を使って火を消すことが任務となっていたため、父と離れて庭の防空壕に身を潜めていた祖母も空襲がひどくなるにつれ、隣に住んでいた人と一緒に線路近くの田んぼのたくさんある建物のないところに逃げたという。「パーンと弾ける音がすぐ頭にあたるような気がした。」と語る祖母の表情はこわばっていた。その時には、駅の貨物列車に爆弾が落とされ燃えている光景も目にしたという。富山市内に流れている神通川にも多くの人が逃げてきたが、B 29はそれを狙って攻撃した。「富山だけでどれだけ多くの人々が亡くなったか分からない。」と遠くを見つめるように語る。富山大空襲はおよそ三時間にも及んだ。B 29が去っていった後に道でぼったりと父に出会ったそう。翌朝にあたる八月二日、「家も柱も一つもなく、たま

に田んぼの中に亡くなっている人を見受けられた。火力は凄まじいもので、燃えるだけ燃えた。」と何度も何度もその光景を思い出しては口にしてきた。家もすっかりなくなっていたが、前日父が釣ってきた水に入っている鮎だけが生きて残っていたという。

その後、母や兄弟がいる横江へと向い、よその家の一部屋を借りて生活していた。夏休みが明け、九月の学校は焼け跡の後始末から始まったという。

昭和二十年八月十五日、「終戦を迎えてもまだ生活は苦しかった。」そう語る祖母からは当時の大変さがにじみでるように伝わってきた。じやがいもやかぼちやの腐る臭いが鼻につき、なかなか食べることができなかつたこともあるそうだ。臭いを気にせずじやと食べられるようになったのは、祖母が五十歳を過ぎたころだったという。昭和二十一年三月、父とおばが、岩瀬（富山県）から運んできた木材で家を建て、やつと暮らせるようになった。小さい家から少しづつ大きな家へと作り変え、食糧難だったため畑にいろんなもの作って自分達で生産するという、まさに自給自足の生活を送っていた。

昭和二十五〜三十年に掛けて少しずつ色んなものが出てきた。その中で、今でも忘れられないのが「ビスケット」だったという。当時、砂糖を使った甘いものはほとんどなく、初めて食べた時の衝撃は、今でもよく覚えているそうだ。

現在、富山市では毎年八月一日に神通川で花火大会が行われている。これは富山大空襲以来、犠牲になった人を悼むために行われてきたものなのだ。インタビューを通して祖母が何度も語った言葉の中に私が特に印象に残ったものがある。「結婚して二人の男の子が生まれた時、平和憲法があると言っても、もし戦争になれば、健康な人は出征しなければならぬ。息子達がそのような運命にあわないだろうかという恐怖心が、なかなか離れなかつた。」祖母の恐怖心がなくなつたのは子供たちが十五歳を過ぎたあたりだという。

祖母が戦争を体験してすでに六十五年が過ぎようとしているが、今回、話を聞いて、こんなにも一つひとつのことをはつきりと覚えていくことから、戦争が残した心の傷が癒えることはないのだと感じさせられた。実際に戦争を体験していない私たちには、その時の情景や惨さ、恐ろしさは想像の域を超えないが、多くの人々に残した傷から、戦争の恐ろしさは大変なものだったということと二度と戦争を起さずしてはならないとしつかりと感じ取ることができる。

私たちはこれから、このことを次の世代へと伝えていかなければならないとインタビューを通して強く感じた。

※この文章は成蹊大学文学部墓田ゼミによる戦争体験インタビュー集より転載しました。